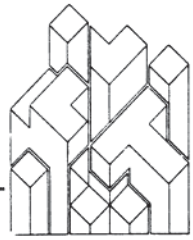
モノグラフ
中学生の世界
vol.14

©1983. 株式会社 福武書店 教育研究所／加藤智禧・中原文子・賀川雅子・渋谷周子
放送大学教授 深谷昌志・尾木直樹・田村 豊・長嶋安男・松永 渉・山田暁生

中学生の部活動



目次

特集 ●部活動の意味 …… 2

調査レポート ●中学生の部活動

本報告書の要約 …… 5

第Ⅰ章 部活動に対するイメージ

1．調査の概要 …… 6
2．部活動で得られるもの …… 7
3．生徒が求める部活動のあり方 …… 13
4．部活動に対する親の期待と不安 …… 18

第Ⅱ章 部活動に参加している生徒

1．好きで楽しい部活動 …… 20
2．教育効果 …… 27
3．指導者と友人 …… 29

第Ⅲ章 部活動を途中でやめた生徒

1．やめた時期と理由 …… 32
2．やめてからの生活 …… 38

第Ⅳ章 部活動に一度も参加していない生徒

1．部活動に参加しない理由 …… 40

第Ⅴ章 学業成績と部活動

1．学校の楽しさ …… 47
2．学業成績との関係 …… 49

第Ⅵ章 教師たちの部活動観

1．部活動に対する考え …… 54
2．部活動指導をしていない教師の意見 …… 55
3．部活動指導をしている教師の意見 …… 56

まとめに代えて …… 59

資料1 基礎集計表 …… 61

特集

部活動の意味

放送大学教授　深谷昌志

自己像の暗さ

これまで、さまざまな調査をとおして中学生の姿を追い求めてきたが、そうした過程をとおして、生徒たちの暗い自己像が浮かんできた。高校進学を控えて、成績に神経質にならざるを得ない。しかし思うような成績をとりにくい。そうした状況から、生徒たちの自己像が暗さを増す。

特に、中学生は集団の中で自己をみつめるので、他人との関係の中で自己をとらえることが多い。つまり、自己像を確立しようとして、友人と比較して自分をとらえようとする。しかも、そうした場合、ともするとどの領域についてもトップの子どもと対比をしやすい。英語の力はあいつが一番だが、あいつと比べると、英語の力が劣る。数学の力はあいつより、平均して25点は低い。そして、運動神経は、あいつにかないそうにもない……という具合である。

そうした対比の中に自己を位置づけるので自分の存在が小さいもののように思われてくる。所詮、自分は自分でしかない。だから、自分なりのペースで自分を伸ばしていこう

と、いわば開き直りの気持ちになれるのは高校時代に入ってからのことになろう。

見方によれば、中学教育の問題の大半は、中学校に在籍している生徒たち、つまり中学生が、自己像を確立できない上に、他人との関係に敏感な年頃であることから生じているのであろう。自分に自信を持てないから、時には虚勢を張って肩をいからせる。そうした反面、友人や教師の何気ない一言にも深く傷つく。そうした対照的な反応も、自分に自信を持てないところから出発するという意味では、共通性を備えている。

ある市の調査から

先頃、大阪府下A市から依頼されて、小・中学生の意識調査を実施することになった。その中で、「授業中、あなたは自分らしさを発揮していると思いますか」と尋ねたところ、

とても発揮している	2.7%	8.7%
かなり発揮している	6.0%	
やや発揮している		25.5%
あまり発揮していない	47.8%	65.8%
ぜんぜん発揮していない	18.0%	

という結果であった。3分の2近くの生徒は、授業の時間に自分らしさを発揮できないでいるという。もっとも、

〈英語の授業で話のわかる割合〉

100%わかる	10.8%	43.2%
70%わかる	32.4%	
半分ぐらいわかる	27.1%	56.8%
30%わかる	17.4%	
ほとんどわからない	12.3%	

〈英語や数学の授業を受ける時の気持ち〉

とても楽しい	6.7%	36.5%
やや楽しい	29.8%	
ややつまらない	38.1%	63.5%
とてもつまらない	25.4%	

〈勉強は得意だと思う割合〉

とても得意	2.3%	34.1%
かなり得意	7.5%	
やや得意	24.3%	
やや苦手	37.2%	65.9%
かなり苦手	16.1%	
とても苦手	12.6%	

などの結果を合わせて考えると、授業の内容がわからず、つまらないと思いながら、勉強に苦手意識を持って、授業に臨んでいる生徒の姿が浮かんでくる。

A市の教師の名誉のために付け加えるなら、こうした結果が出されたからといって、A市の中学が特に問題をはらんでいるわけではない。むしろA市の教育は、大阪近郊の都市の中では、どちらかと言えば、安定し、指導の行き届いている地域に属する。したがってその他の都市でも、同じような調査を実施するなら、勉強が苦手であると回答する生徒の割合はA市の数字を上回るだろう。

中学校ともなれば勉強に難しさが増す。したがって、すべての生徒が意欲的に学習に参加できるのが学校としての理想であっても、現実問題としては、ある程度、勉強に苦手意識が生ずるのはやむをえまい。

同じ調査で、生徒たちに自分についての評価を求めた結果は以下のようであった。

	そう思う	そう思わない
異性に人気がある	9.1%	90.9%
勉強ができる	17.4%	82.6%
リーダー格である	19.1%	80.9%
体力なら負けない	24.3%	75.7%
努力型のタイプ	29.4%	70.6%
友だちが多い	63.6%	36.4%

友だちの数なら自信を持てる。しかし、それ以外は、自分に自信を持てないという反応である。

部活動には人生がある

中学生の自己像が狭く閉ざされているのはこのA市の調査に限らず、くり返し、指摘してきた事実である。こうした中学生に対し、「これなら自信がある」といえる領域を与えるにはどうしたらよいのだろうか。

中学生の調査を重ねていると、部活動の重みを感じることが多い。授業には関心を持てないけれど、部活動を終わってから、友だちと雑談している時が、なんとも楽しい。また、対抗試合で決勝ホームランを打ったのが中学校生活の中でいちばん印象に残っている、あるいは、バレーボール部でレギュラーになった時がいちばんうれしかった、などという生徒の声を耳にする機会が多い。

確かに、たくさんの友だちと、1年あるいは2年間、一定の目標に向かって、精進を重ねるという体験は、今の中学生が遊び友だちを持っていないだけに、彼らにとって初めての貴重なものとなろう。

特に運動部の場合、長い時間をかけての練習、そして、レギュラーを目指しての競い合いや対抗試合での勝ち負けなどがつづく。その間には、けがをしたり、スランプにおちいったりすることもあろう。もちろん、自分自身だけでなく、友だちとの間にもさまざまな葛藤が起こる。

そうした意味では、部活動は生徒にとってドラマがたえまなく進展する人生に似ている。ライバルに対する嫉妬や失意、あるいは友情など心のおりなす小さなエピソードも生まれてくる。部活動の持つこうした側面を視野に入れると、部活動は生活体験に乏しく友とのふれ合いを持たない現在の生徒たちの心身の成長を促進する特効薬のように見えてくる。

事実、生徒指導を担当している教師たちと話していると、部活動に打ち込んでいる生徒が非行に走ることはほとんどないが、非行的な行動に関心を持ち始めると部活動も欠席がちとなり、やがて退部していくケースが多いという話をよく聞く。部活動への参加は非行化を防ぐ安全弁のような役割を果たしているのであろうか。

生徒の心の中で部活動の占める意味は大きい。そして時には、部活動が生徒にとって学校生活のすべてにもなりうる。が、その一方で、部活動の運営については、学校による差も大きく、さまざまな問題を抱えているのも事実である。

例えば、強い部を作ろうとすると朝練習や土日を返上しての練習が必要となるがそうなると勉強との両立が難しくなる。そうかといって、楽しさだけでは部活動が盛り上がらない。運動部では、上級生と下級生との間に極端な形で上下関係が生まれ、よほど注意して指導しないと、しごきなどへ走りやすい傾向もある。

また、部活動の指導は、教師にとって授業以外の仕事になるので、オーバーワークになりやすい。そのため、学級経営や教科指導を大事に考える教師の中に、部活動指導とのジレンマに悩んでいる者が少なくない。

その上、施設や備品が貧困なので、生徒の望むような活動を展開しにくい。そうかといって、後援会のような組織を作るのも積極的になりにくい。

つまり、部活動に大きな期待を託すのはよいのだが、現在の部活動が施設や設備面、指導面など、すべてにわたって未解決の状況下にある。つまり、教師の熱意や父母や地域の人たちの好意と生徒たちのやる気に支えられて、活動がつづいている。しかし、生徒たちの心の中で占めている比重の割に条件作りの遅れが目につく。よりよい部活動のあり方を真剣に考える必要性を痛切に感じる。

調査レポート　中学生の部活動

〈執筆分担〉

田村　豊（東京都杉並区立井草中学校教諭）　Ⅰ章
尾木直樹（東京都練馬区立練馬中学校教諭）　Ⅱ章
松永　渉（東京都新宿区立牛込第1中学校教諭）　Ⅲ章　Ⅳ章
長嶋安男（東京都東久留米市立久留米中学校教諭）　Ⅴ章
山田暁生（東京都町田市立成瀬台中学校教諭）　Ⅵ章
深谷昌志（放送大学教授）　まとめに代えて

本報告書の要約

①体力と技術を目的として

体力(運動部)や技術(文化部)の充実を目的として、入部している者が多い。（P.8図1 P.9図2）

②厳しくて実力本位の部活動を望む

生徒たちは、厳しい雰囲気でよいが、実力本位の部活動であってほしいと考えている。（P14図5）

③勉強との両立は難しい

部活動と勉強との両立は難しいと思っている生徒の割合は77%に達する。（P.17図9）

④部活動の実態

毎日2時間ぐらい、そして、日曜あるいは休日も返上して練習しているのが、部活動の平均像となる。（P22　表4）

⑤部活動をやめた理由

部活動をやめてよかったと思う生徒が63%に達するが、部活動をやめても、生活そのものはさして変わっていない。それと同時に、もう一度、中学生になったら、部活動に入りたいと答えている者が6割を超えるので、退部は心ならずという感じも受ける。(P.38 図29)

⑥部活動に入らなかった理由

勉強の両立が難しいし、入りたい部がなかったという理由が大半を占める。(P.44図37)

⑦教師の意見

部活動は非行の予防にも役立つと思っているが、肉体的にも精神的にも負担になると答えている教師が6割を超える。(P.57 図43・図44)

第Ⅰ章 部活動に対するイメージ

1．調査の概要

調査の目的

多くの新入生から「 中学校生活でもっとも期待しているもの」として、まず第一に挙げられるのが部活動である。これは、全国どこの中学校においても、同じ現象が見受けられる。一体、何が中学生たちに対し、こんなにまで部活動に期待を持たせ、彼らの心を揺り動かすのであろうか。

当然、部活動の中に中学生の求めてやまない何かがあり、それを満たしてくれるものがあるからに違いない。生徒たちの意識の中で部活動は中学校生活の重要な部分を構成している。

しかし、学校サイドからすると、部活動の位置づけは、必ずしも明らかでない。そのため、部活動の実態は学校による開きが大きい。そこで今回の調査では、生徒からみた部活動の実態を明らかにすると同時に、教師にも調査票を配布して、部活動に対する意見を求めることにした。

調査の対象

東京、岡山、北海道、青森、長崎の16中学校1,773人（1年587人、2年636人、3年550人）を対象とし学校通しの質問紙調査を実施した。教師対象の調査票は、1校2通ずつ全国5,000校に郵送し、2,963通を回収した。回収率は29.6%であった。なお、調査実施は、生徒、教師とも57年9～10月である。

サンプル構成

（人）

学年＼性別	男子	女子	計
中 1	308	279	587
2	322	314	636
3	295	255	550
計	925	848	1773

2．部活動で得られるもの

運動部で何が得られるか

まず最初に生徒の側に立って、生徒たちが部活動のどこに魅力を感じているのかを探ると同時に、部活動に対し、どのようなイメージを持っているのか解明してみたい。はじめに、すべての生徒を対象にして、「運動部で活動している友だちがその部活動から何を得ていると思うか」ということを質問し、その結果をまとめてみた。それが図1である。この質問では友人について特に制限を加えず自由に運動部で活躍している友だちを思い浮かべさせたので、男子は男子の友人を、女子は女子の友人をおそらく選んでいると思われるが、男女とも成績が中位以上の友人を選んでおり、特に、中の上と上位の生徒が約50%も選ばれている点に注目したい。したがってこの図1の結果は、比較的優秀な生徒をイメージにおいて選んだものである点を考慮する必要があると思われる。

図1で気づくことは男女どちらから見てもすなわち、男子も女子も運動部で育つと思っているものがほとんど同じであり差がないという事実であろう。特に、「体力を養う」、「友情を育てる」、「根性を養う」の3項目については、共通性が高く、約90%の生徒が運動部で得られるとみている。上位5項目を挙げてみると次のようになる。

〈男子〉

- ○技術・能力をみがくこと　93.6%
- ○体力を養うこと　93.2%
- ○友情を育てること　88.2%
- ○強い意志（根性）を養うこと　86.9%
- ○先輩・後輩とのつながりを深めること　83.6%

〈女子〉

- ○体力を養うこと　96.5%
- ○友情を育てること　93.6%
- ○強い意志（根性）を養うこと　92.9%
- ○協力し助け合う心を育てること　92.3%
- ○技術・能力をみがくこと　91.2%

次に図2を見てみよう。図2は、全生徒に対し、「もし自分自身が運動部に入ったとした時、何を得ることを期待するか」ということを質問した結果である。

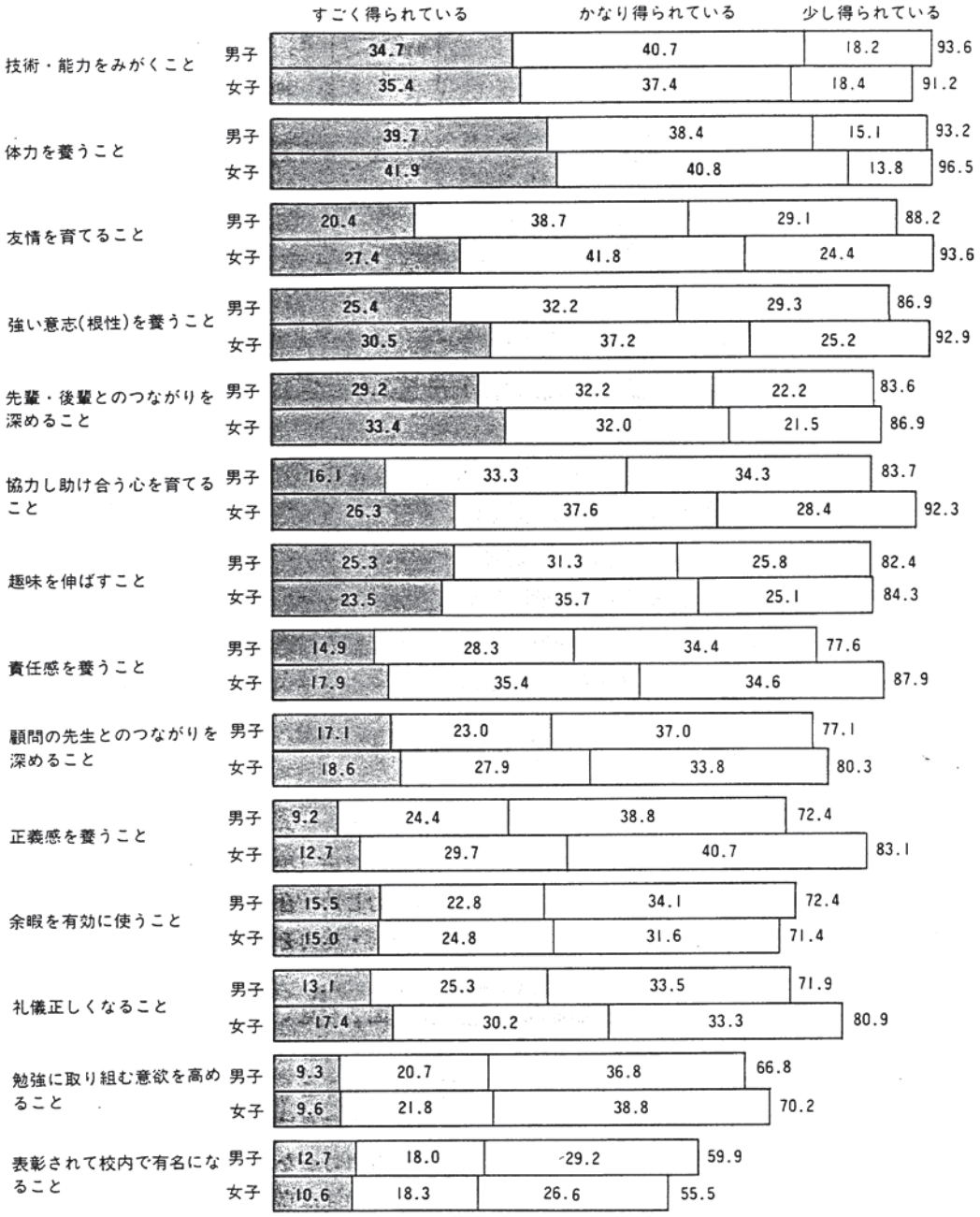
図から明らかなように、大づかみにすると、男女の共通性は高く、「運動部の友だちが得ているもの」と同じ傾向を示している。上位5項目は下記のとおりである。

〈男子〉

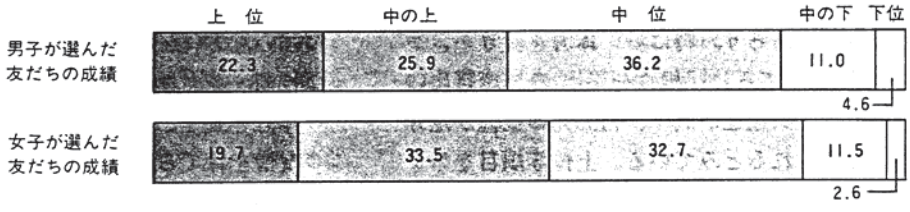
- ○強い意志(根性)を養うこと　22.1%
- ○技術・能力をみがくこと　19.0%
- ○体力を養うこと　18.9%
- ○友情を育てること　11.7%
- ○協力し助け合う心を育てること　5.9%

(図１) 運動部の友だちが得ていると思うもの

(%)



(運動部で活躍している友だちの成績の予想)

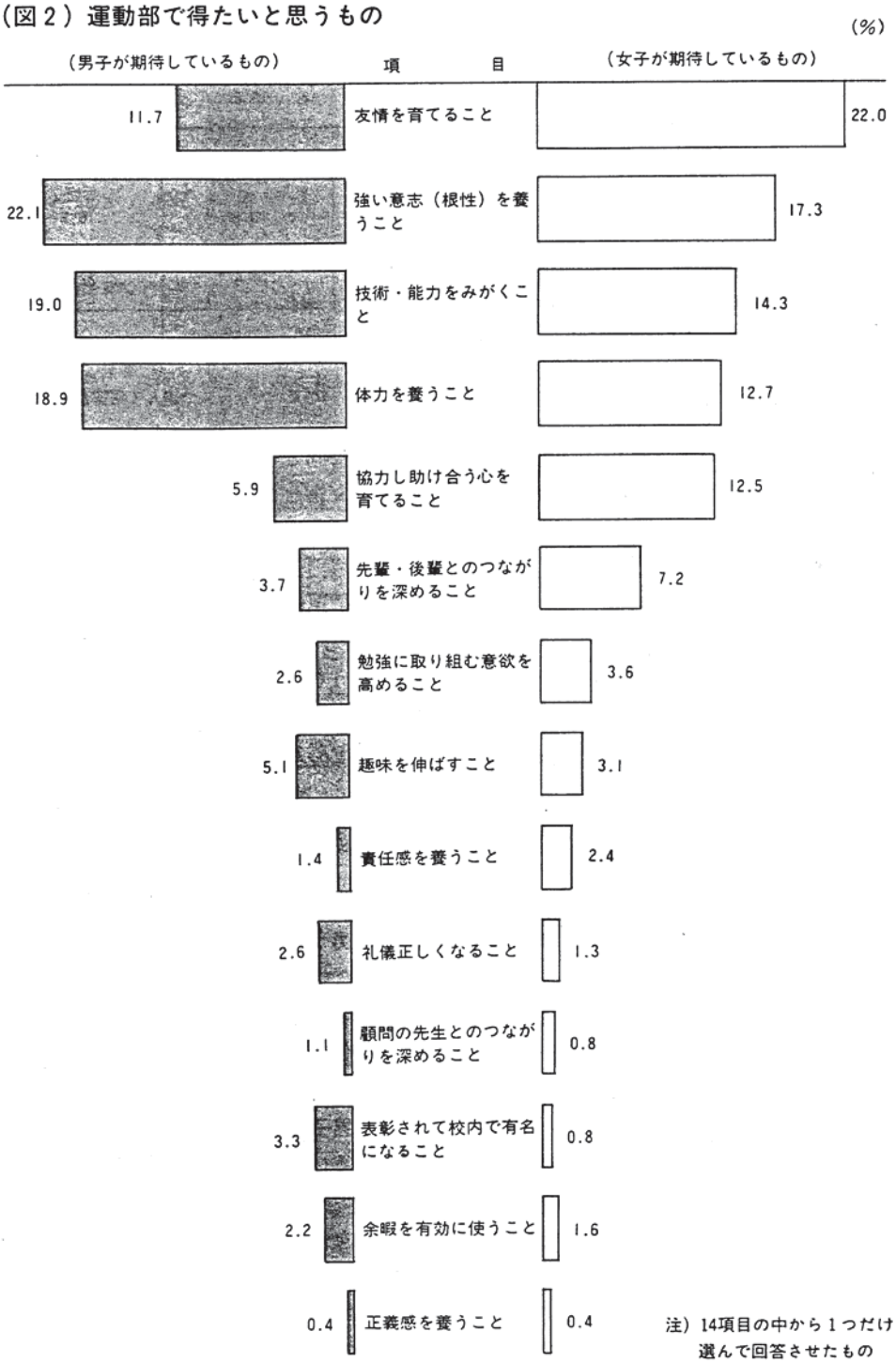


〈女子〉

○友情を育てること	22.0%
○強い意志（根性）を養うこと	17.3%
○技術をみがくこと	14.3%
○体力を養うこと	12.7%
○協力し助け合う心を育てること	12.5%

しかし、やや細かく見ていくと、表1にあるように、男女差、学年差が認められる。例えば、「友情を育てる」の項目などは、高学年になるほど期待感は大きくなっているし、男子よりも女子の方が各学年ともそれぞれ約10%以上高い期待感を示している。「技術・能

（図2）運動部で得たいと思うもの



注）14項目の中から1つだけ選んで回答させたもの

（表１）学年・性別にみた運動部で得たいもの

（%）

学年・性別＼項目		友情を育てること	技術・能力をみがくこと	体力を養うこと	強い意志（根性）を養うこと
1年	男子	8.4	15.3	17.7	20.9
	女子	20.3	7.2	15.6	16.9
2年	男子	9.1	20.9	22.2	22.2
	女子	19.4	18.3	12.6	18.0
3年	男子	17.5	20.5	16.4	23.1
	女子	26.8	16.9	10.0	16.9
男子平均		11.7	18.9	18.8	22.1
女子平均		22.2	14.1	12.7	17.3

注）図１の14項目の中から１つ選んで回答させたもの

力をみがくこと」や「根性を養うこと」では、逆に女子よりも男子の方が得たい意欲が強くなっている。

文化部で何が得られるか

図３は、「 運動部で育っているもの 」の時と同じように全生徒を対象にして、文化部で活動している友だちを見て、その友だちが文化部の活動の中から何を得ているかを予想して答えてもらったものである。運動部の時と同じように、男女の共通性も強く、全体的に同じ傾向を示している。

上位５項目をまとめると下記のようになるが、女子の４位、５位は予測していなかったものであった。

〈男子〉

○趣味を伸ばすこと　86.5%
○技術・能力をみがくこと　81.6%
○余暇を有効に使うこと　81.2%
○友情を育てること　78.3%
○先輩・後輩とのつながりを深めること　77.4%

〈女子〉

○技術・能力をみがくこと　91.5%
○趣味を伸ばすこと　90.0%
○友情を育てること　86.5%
○責任感を養うこと　83.9%
○協力し助け合う心を育てること　82.5%

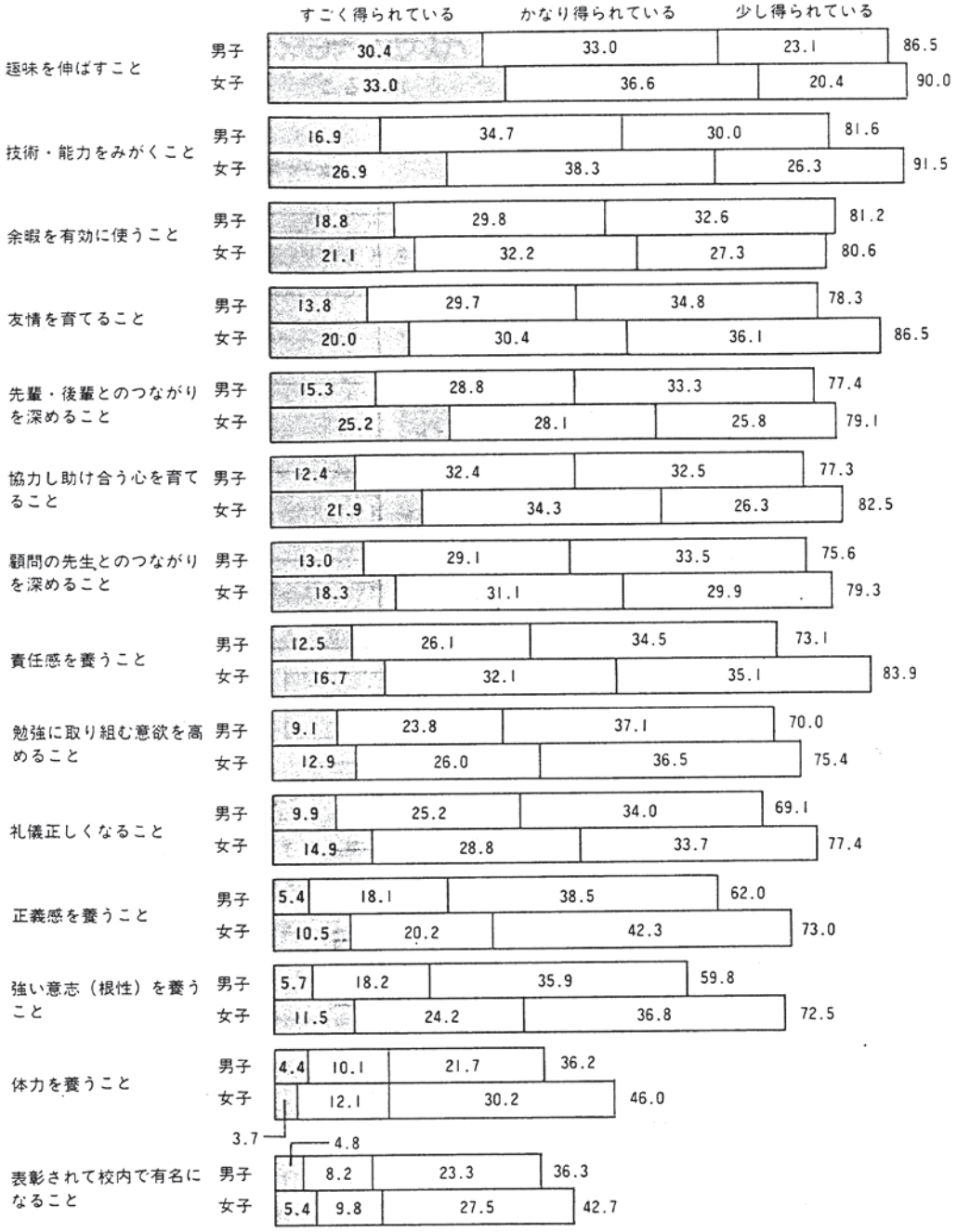
次に運動部の時と同じように、全生徒に対し、「もし、自分自身が文化部に入った時、どのようなものを得たいと思うか」という内容について質問し答えてもらった。図４はこれをまとめたものであるがやはり男女の共通性は高く、同じ傾向を示している。しかし、「 責任感を養うこと 」という項目について、女子は「 友だちの得ているもの 」の４位に挙げているが男子にはなく、「自分が得たいもの 」では男子は４位にあるが女子にはない。この辺に、性差が微妙に反映されているような気がする。

文化部に入って自分が得たいもののベスト５を挙げると次のようになる。

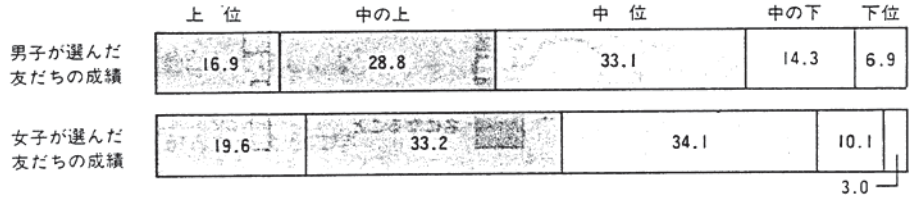
〈男子〉

○技術・能力をみがくこと　21.8%
○趣味を伸ばすこと　21.1%
○友情を育てること　8.9%
○責任感を養うこと　8.3%
○助け合う心を育てること　7.7%

（図３）文化部の友だちが得ていると思うもの



（文化部で活躍している友だちの成績の予想）



〈女子〉

○技術・能力をみがくこと　20.5%

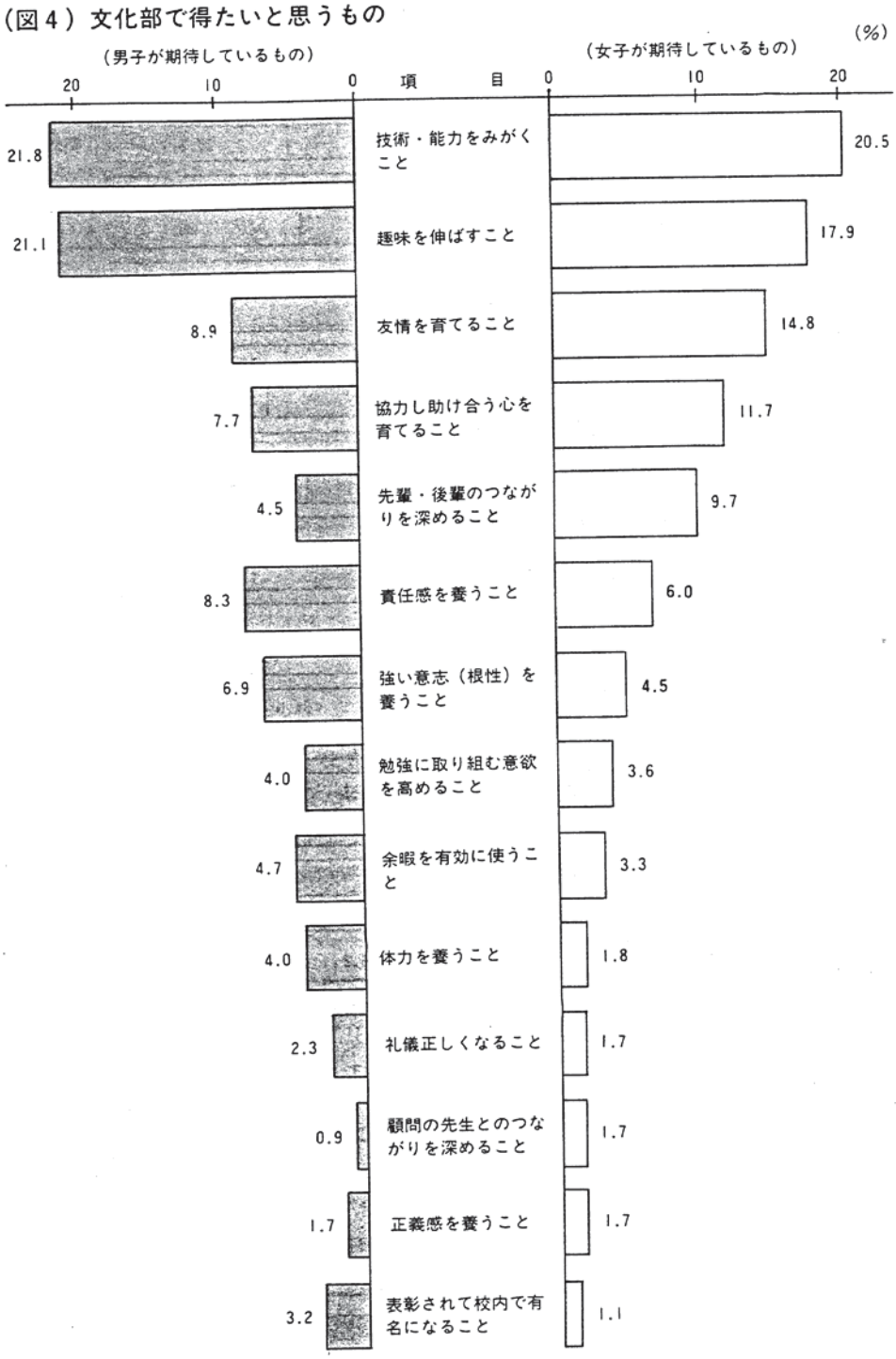
○趣味を伸ばすこと　17.9%

○友情を育てること　14.8%

○助け合う心を育てること　11.7%

○先輩・後輩のつながりを深めること　9.7%

（図4）文化部で得たいと思うもの



注）14項目の中から1つだけ選んで回答させたもの

3．生徒が求める部活動のあり方

楽しい部か、厳しい部か

現在の中学校教育の中で部活動のあり方ほど多様化しているものはないと言われる。どれをとってもひとつとして同じものがないほど個別化してしまっている。それは、部活動が戦後の新しい中学教育の成長の過程で、それぞれの学校の部活動の歴史や伝統を背景にして、さまざまな部活動のあり方が生まれてきたからであろう。ことに、中学校の部活動は顧問教師の考え方や指導方針に大きく左右されるところがあるので、「部活動のあり方は顧問教師の数だけある」とさえ言われるのもそこからきているのであろう。

ここでは、このような教師側の考え方による部活動はさておき、生徒たちは一体どのような部活動のあり方を求めているのか考えてみたいと思う。

図5は、部活動のあり方について、生徒が何を求め、どのように考えているのかという点を中心にまとめた結果である。これによると生徒の求める部活動が非常にはっきりとしていることが理解できる。生徒たちがイメージを抱く理想的な部活動の姿をまとめると次のようになる。

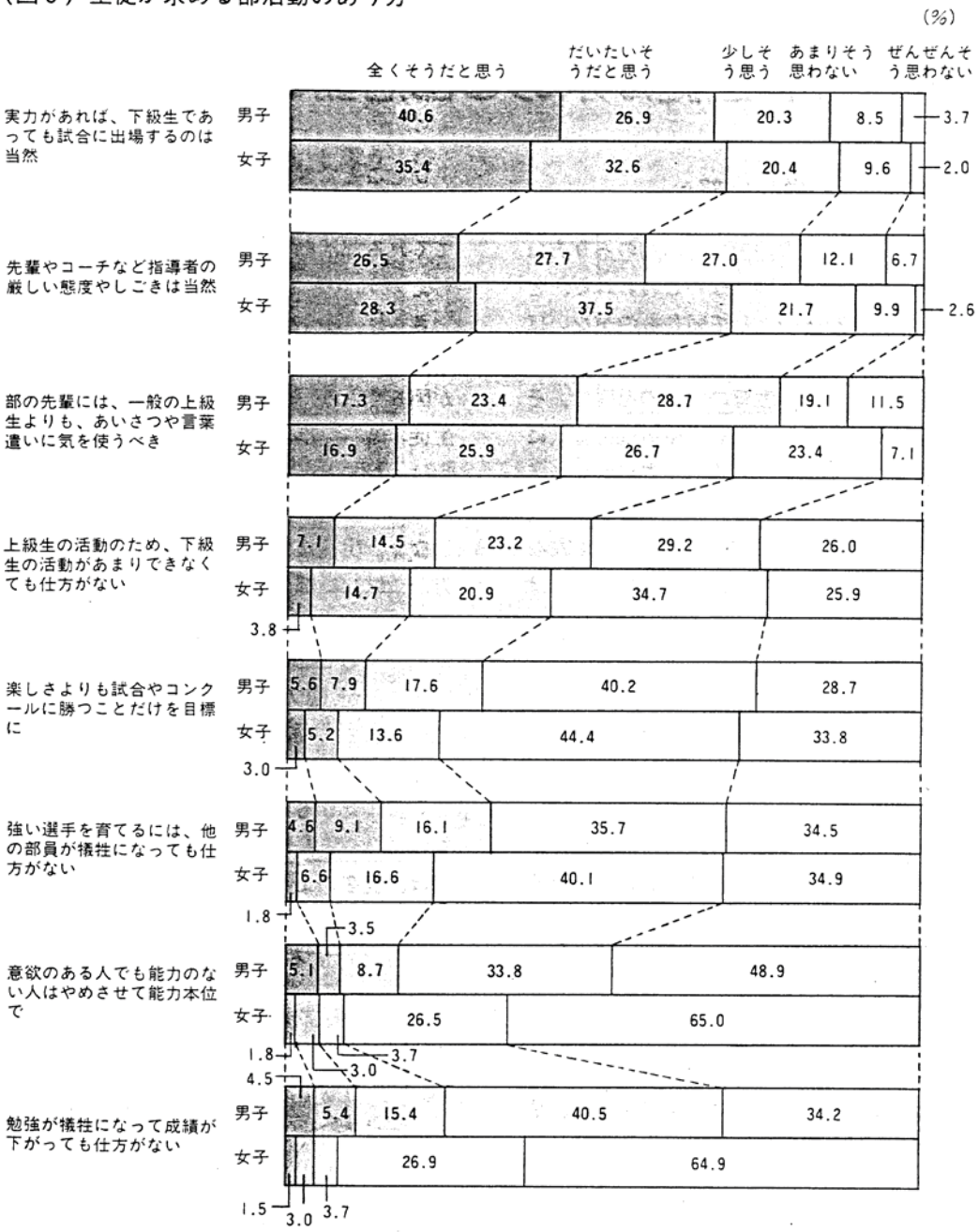
- ○先輩・後輩のけじめは大切にするが、活動の中では学年に関係なく実力本位にする
- ○試合に勝つことだけを目標に能力のある者だけを優先した活動ではなく、能力が低くてもやる意欲のある者は仲間として共に活動していくような部活動にする
- ○指導者の厳しい態度は当然であるが、選手養成だけのための活動にしてほしくない
- ○部活動のため成績が下がらないように学習と両立できるような部活動でありたい

ひとことで言うと、「けじめのある厳しい活動でもよいが、一人ひとりの欲求を満足させてくれる部活動」を生徒たちは求めていると言えよう。

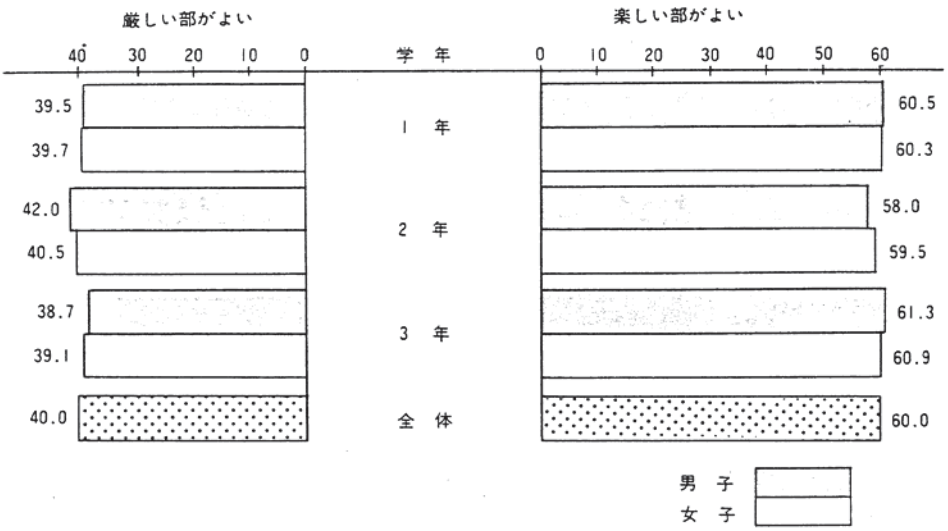
さらに、もう少し詳しく、「厳しい部と楽しい部のどちらに入りたいか」を質問したものが図6であり、厳しい部（根性型）を望む生徒と楽しい部（同好会型）を望む生徒の比は4対6という割合になっている。この割合は、学年による差も男女による差もほとんどなく、生徒たちの求めている部活動のあり方が、厳しい部を指向するグループと楽しい部を指向するグループとに大きく二分される傾向があることがわかる。

ところが、図7にあるように、運動部に入っている者で「部活動に毎回必ず出席する」といった積極派では、さすがに厳しい部と楽しい部の比が6対4と、厳しい部指向が強くなっている。しかし、文化部に入っている者では、表2のように厳しい部と楽しい部の比は3対7の割合になっており、それぞれ部のあり方に対する立場の違いがよく表れている。

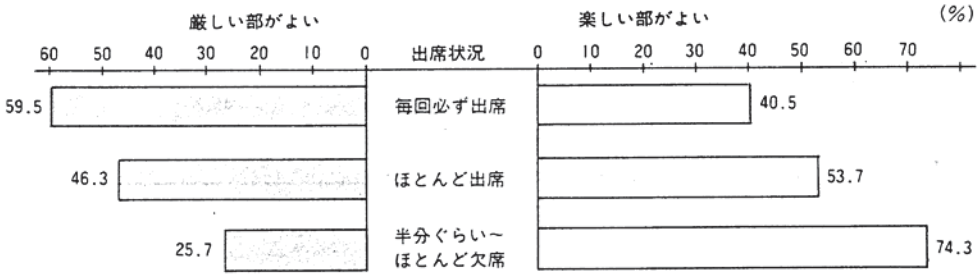
（図５）生徒が求める部活動のあり方



（図６）厳しい部と楽しい部のどちらがよいか



（図７）運動部加入者の部活動出席状況と部活動指向の傾向



（表２）運動部・文化部別の部活動指向

(%)

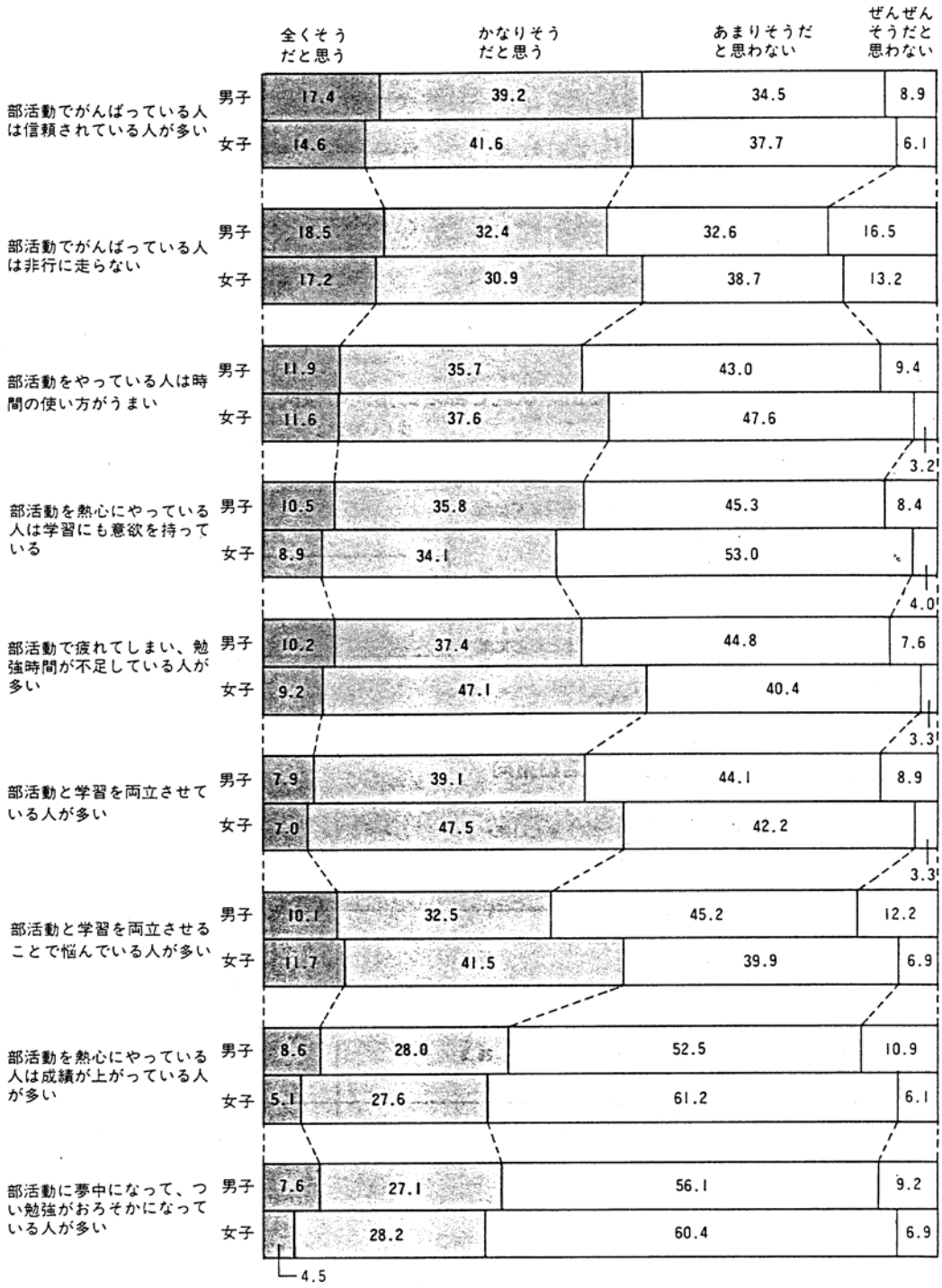
項目 ＼ 部活動指向	厳しい部がよい（練習は苦しく厳しいが優勝する部がよい）	楽しい部がよい（試合は負けるが活動は楽しい部がよい）
運動部に加入している者	45.9	54.1
文化部に加入している者	28.8	71.2
全体（平均）	43.6	56.4

部活動が生活や学習に与える影響

中学生が大きな関心と期待を寄せている部活動は、中学生の日常の生活や学習の面にどのようなかかわりを持っているのであろうか。

図8はその点について自分のまわりにいる友だちをみて答えてもらったものであるが、

（図8）部活動が生活・学習面に与える影響



次のようにまとめることができよう。

○部活動に、つい夢中になって、勉強をおろそかにしている友だちが目につく。それに、勉強時間がどうしても足りずに部活動と学習の両立に悩んでいる者もかなりいる

○中には、学習にも意欲を持って努力している者もいるが成績はあまり上がっていないようだ

○しかし、部活動をしている者は、非行に走らず友だちからも信頼されている者が多い

以上のことからもうかがえるように、中学生にとっての最大の悩みは「部活動と学習をどう両立させるか」であり、この両立は中学校生活での大きな課題となっている。

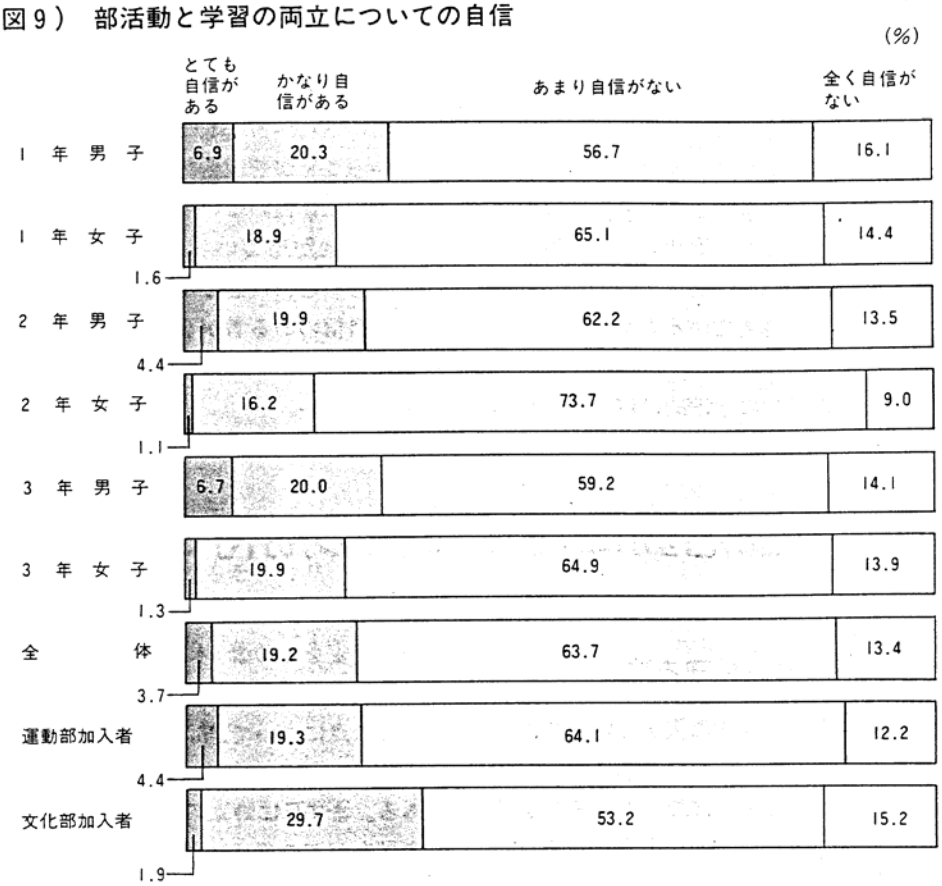
そこで、部活動と学習の両立の問題をもう少し詳しく見たのが図9である。

まず、両立させることについての自信についてであるが、全体的に見ると、「両立に自信がある」者と「両立に自信がない」者の比は2対8となっており、自信喪失派が圧倒的に多い。

また、どの学年でも男子より女子の方が両立に自信のない者の割合が高くなっている。しかし、実際はどうもこの逆ではないかと思われる。これは、女子の方が男子より学習についての自己評価が一般に厳しいということから生ずるように考えられる。

このように、部活動と学習の両立の問題は、複雑で簡単に結論を出すことはできない。例えば、表3は部加入者の出席状況と部活動と学習の両立の関係をみたものであるが、運動部の活動に積極的に参加すれば、どうしても

（図9） 部活動と学習の両立についての自信



（表３）部活動の出席状況×部活動と学習を両立させる自信

（%）

部活動の参加状況 ＼ 尺度		とても自信がある	かなり自信がある	あまり自信がない	全く自信がない
運動部	毎回必ず出席	8.2	25.7	56.8	9.3
	ほとんど出席	2.5	18.6	68.2	10.7
	半分ぐらい～ほとんど欠席	1.1	11.2	69.1	18.6
文化部	毎回必ず出席	1.9	26.9	59.7	11.5
	ほとんど出席	3.3	36.1	49.1	11.5
	半分ぐらい～ほとんど欠席	0.0	25.0	50.0	25.0
全体（平均）		4.1	20.8	62.4	12.7

学習時間が不足し部活動と学習の両立を困難にしていくと考えられる。ところが実際は、表に示されているように、運動部でも文化部でも積極的に活動に参加し「活動には毎回必ず出席する」といった出席状況のよい生徒ほど、「部活動と学習の両立」について「自信を持っている」と答えている者が多いのである。

すなわち、部活動に意欲的に取り組み積極的に参加している者は、その意欲は学習面でも生かされ学習にもやる気を持って取り組んでいることが想像される。逆に部活動も欠席がちで積極性のない者は、やはり学習面にもこの傾向が出ているのではないかと思われる。しかし、残念ながら部活動と勉強との両立に自信のある者が２割にすぎないことを考えると、部活動のあり方にも問題があるのかもしれない。

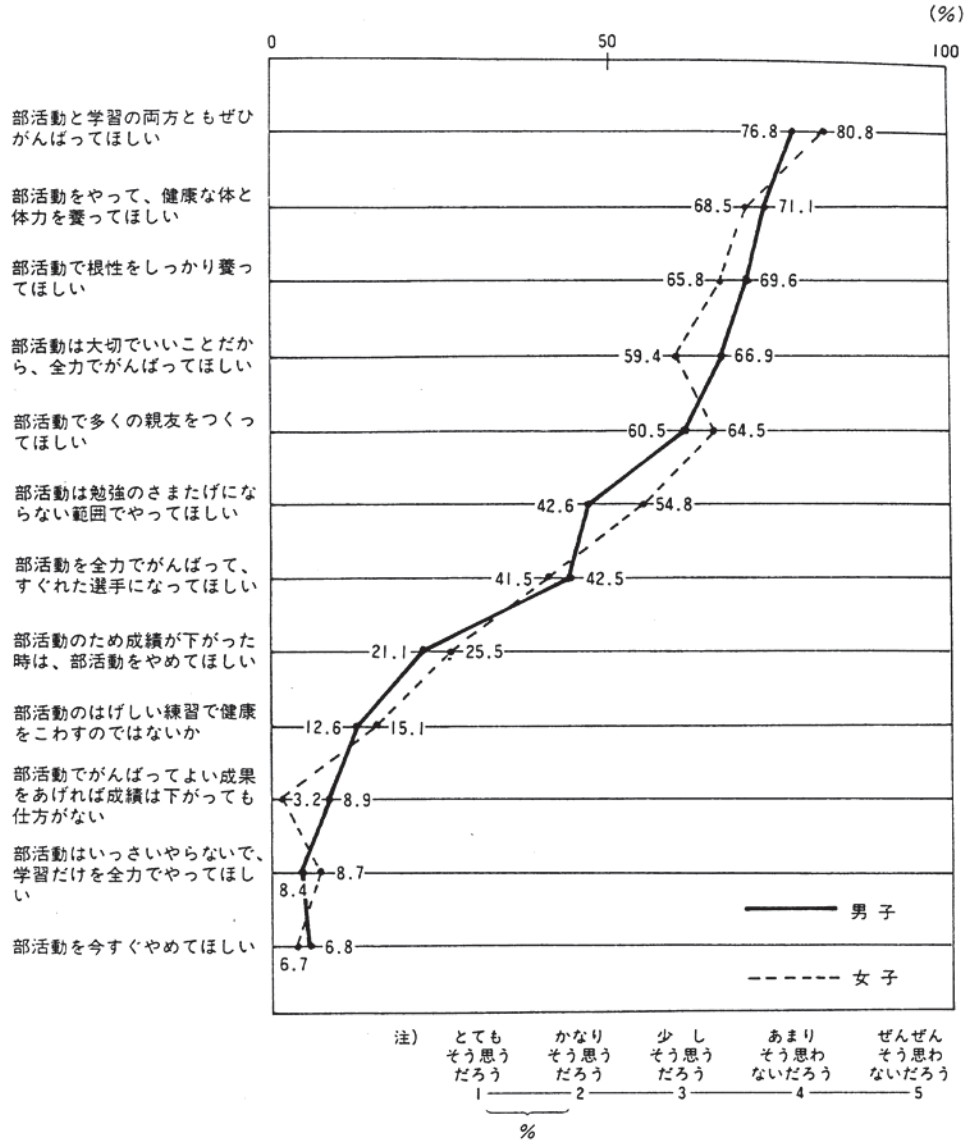
４．部活動に対する親の期待と不安

子どもの部活動を見守る親

生徒たちにとって非常に大きな魅力であり充実感を与えてくれる部活動であるが、この部活動の虜になって夢中になっているわが子を眺めながら、親たちはどのような期待を持ち、また、どのような不安を感じているのであろうか。子どもたちは、このような親の期待や不安をどのように感じ、受け止めているのであろうか。

この点について、部活動に対する親の期待と不安とを生徒の目をとおして見たのが図10である。まず目につくのは、男子の見方と女子の見方がどの項目についてもほとんど同じといってよいほど共通性を持っていることである。

（図10）生徒からみた部活動についての親の期待と不安



これは、どの親も子どもを見守り、期待している心は、皆同じということであり、また、その親の気持ちを直感的に感じとる子どもの心もまた皆同じということを表しているのではないかと思われる。

6割程度の親は「全力でがんばってほしい」と部活動を積極的に支援している。しかし、そのために成績が下がることについては非常な不安を持っており、約80%の親はそのことに強い拒否反応を示している。これは、多くの親が自分の中学校時代の部活動の様々な体験から、中学校の部活動の意義を十分認識しているからであろうが、その反面、部活動の持っているマイナス面についてもよく理解しているからではないかと考えられる。

第II章 部活動に参加している生徒

1．好きで楽しい部活動

入部動機と活動の量

前章では中学生全体を対象として、生徒たちの抱く部活動像を考察してきた。しかし、部活動についての気持ちは、部活動に参加しているかどうかにより異なってこよう。そこで、以下、部活動へ参加している生徒(II章)、部活動をやめた生徒(III章)、はじめから部に入らなかった生徒（IV章）の順で、部活動についての気持ちを紹介していくことにしたい。まず、本章では部活動に参加して活動している生徒をとりあげる。

図11が示すように、子どもたちの入部の動機は「 好きだから 」(70%)、「体力をつけたいから」(46%) が主なところである。

特に運動部への入部の53%が「体力をつけたいから」を求めていることは、文化部のそれが3%しかないことと比較するときわ立っている。ちなみに、本調査では入部者の88%が運動部に所属していた。

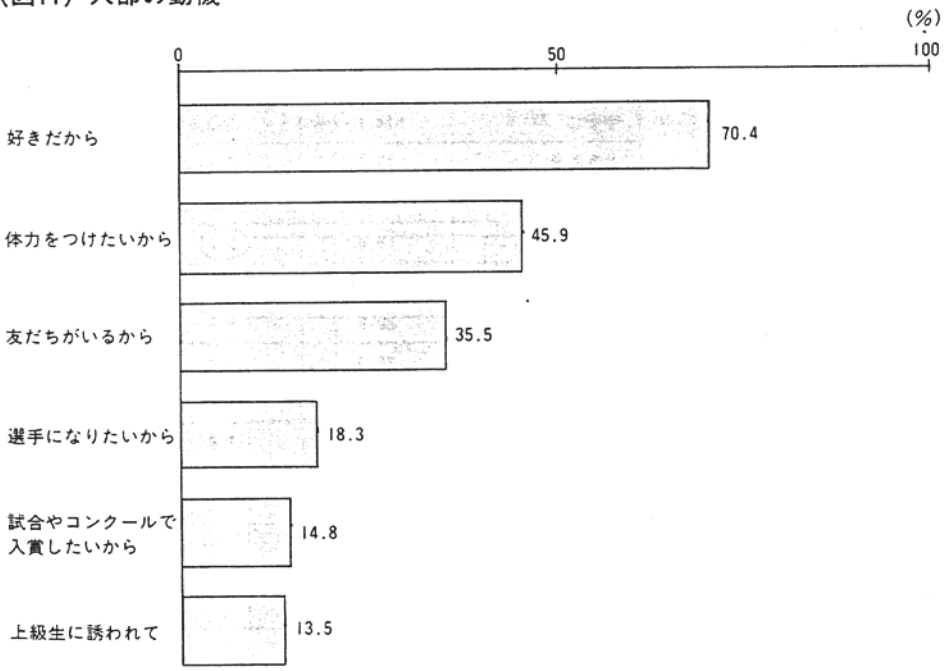
ところで、活動量については(表4参照)、1週間のうちの5日～6日活動している生徒

が40%でもっとも多い。1日の時間は「2時間」(55%)から「3時間」(24%)がほぼ8割を占める。さらに、日曜日や休日もほとんど毎回活動している者が33%と高い上に、夏休みまでフル回転している者も31%いるのには驚かされる。

この活動量については、学校間に差の大きいことも特徴のひとつである。学校別の詳細のデータは略すが、例えばある学校では週に7日間活動している生徒が39%もいるかと思えば、ゼロの学校もある。日曜日、休日もフルに活動に参加する者が、実に99%にものぼる学校があるかと思えば、もっとも少ない学校では、4%にすぎない。

一人ひとりの出席状況を図12に掲げたが、「毎回」と「ほとんど出席」している者が70%にものぼる。逆に「ほとんど欠席している」と答える者は、4%たらずである。したがって、活動量が「多い」とする者は、予想に反して23%しかいなかった。それでも、やはり運動部に所属する者にとっては、ほとんど毎日2～3時間のハードなトレーニングは、楽しくても疲れるらしく、「ぐったりして何もできない」(7%)、「かなり疲れる」(29%)、を合わせると36%の生徒が身にこたえるほどの疲れを感じているらしい。

(図11) 入部の動機



注) 9項目(巻末資料 p.70～p.71 参照)から複数回答

（表４）活動量はどうなっているか

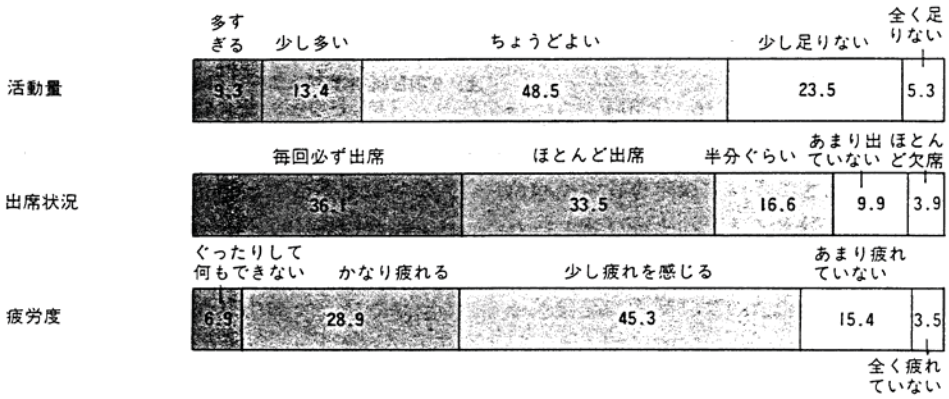
（%）

単　　位	活　動　量	運　動　部	文　化　部	平　　均
週あたり	１日～２日	25.9	36.6	27.0
	３日～４日	17.1	27.3	18.2
	５日～６日	39.5	32.7	38.8
	７日	17.5	3.4	16.0
平日の活動時間	活動しない	0.3	5.5	0.9
	１時間	17.0	30.8	18.7
	２時間	54.6	33.5	52.0
	３時間	23.6	24.7	23.8
	４～９時間	4.5	5.5	4.6
日曜日や休日の活動時間	活動しない	26.5	72.6	31.4
	１～２時間	25.3	5.3	23.1
	３～４時間	34.3	12.2	32.0
	５～６時間	9.6	6.1	9.2
	７～９時間	4.3	3.8	4.3
日曜日や休日の活動	ほぼ毎日	33.3	3.8	29.8
	半分位	14.1	3.2	12.7
	ときどき	17.5	15.3	17.3
	あまりしない	15.7	18.5	16.1
	ぜんぜんしない	19.4	59.2	24.1
夏休みの練習	ほぼ毎日	30.6	15.3	28.9
	３週間以上	20.9	9.6	19.5
	２週間位	26.2	14.0	24.7
	１週間位	9.3	19.1	10.5
	ときどき	5.9	17.8	7.3
	ほとんどやらない	7.1	24.2	9.1

注）　○＝最頻値

（図12）部活動の活動状況

（%）



部活動と家庭学習

例年、部活動をやめていく生徒のうち7～8割は勉強と部活動の両立が困難であることを理由に挙げている。また、父母会などでも必ずと言っていいほど部活動と勉強のことが話題になるが、運動部について、部活動と家庭学習の時間を尋ねた結果が**表5**である。

運動部では、家庭学習時間より部活動の方が、「圧倒的に多い」(25%)、「少し多い」(29%)で合わせて54%が、時間としては、毎日勉強より部活動に重点をおいていることになる。

しかし、生徒たちの意識としては、図13、図14からわかるように「どちらもがんばっている」のである。はっきりと「部活動の方に重点をおいている」のは35%にすぎない。

表5によると部活動と学習の両立に悩む者は、運動部では63%に達しているが、本当に部活動は家庭学習を阻害しているのだろうか。もし、部活動のために家庭学習が思うにまかせないのだとすると、「部活動のない日は勉強がはかどるか」という問いに対して肯定的な回答が予想される。しかし、実際は図14に見られるように、45%の者が、「いつもと同じ」と答えている。そして「はかどらない」が23%、「はかどる」は32%であった。

部活動が家庭学習の阻害要因と思われがちなのは、今日の子どもたちの生活が、部活動とテレビしかないようなうすっぺらな実態になっているからではないだろうか。もっと本質的な問題である基本的な生活習慣の確立や集中力の養成などに心を配るべきだろう。

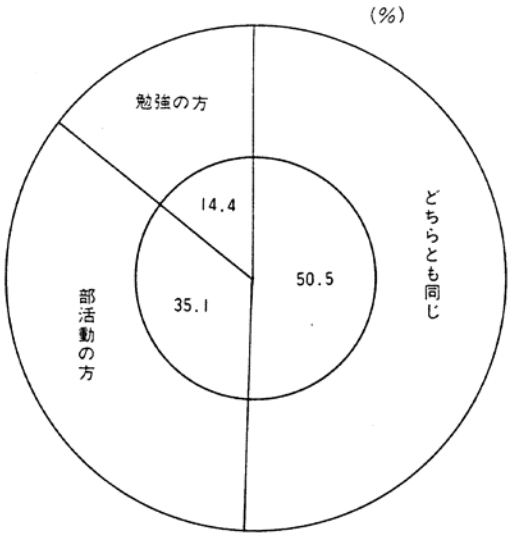
また、朝練習をほとんど毎日2時間以上も行っている学校では、「1時限目の授業に疲れを感じる」者が51%もいた。ここまでくると家庭学習ばかりか、肝心の授業効果にすら悪影響を及ぼす危険もないとは言えまい。

(表5) 部活動と家庭学習

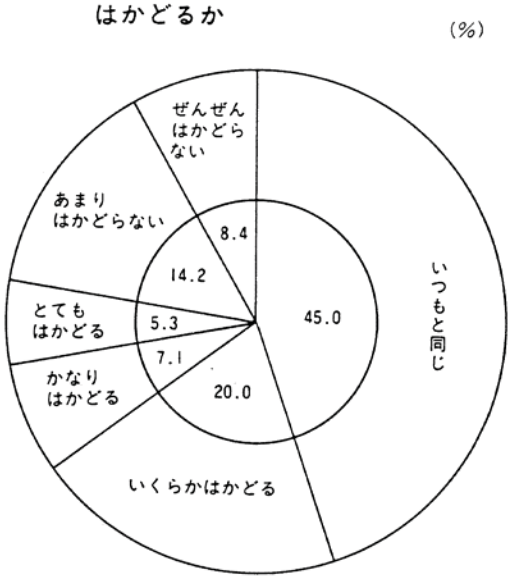
(%)

あなたが週当たりの部活動と塾も含めた家庭学習に費やす時間は		部活動の方が圧倒的に多い	部活動の方が少し多い	ほぼ同じ	家庭学習の方が少し多い	家庭学習の方がだんぜん多い
	全体	23.0	27.6	28.3	15.7	5.4
		50.6			21.1	
	運動部	24.6	29.0	28.9	13.9	3.6
		53.6			17.5	
	文化部	11.6	17.4	23.2	29.1	18.7
		29.0			47.8	
部活動と勉強の両立で悩むか		とても悩む	かなり悩む	少しは悩む	あまり悩まない	全く悩まない
	全体	8.1	14.8	37.4	25.2	14.5
		60.3			39.7	
	運動部	8.7	15.6	38.4	22.8	14.5
		62.7			37.3	
	文化部	3.8	8.9	29.9	26.1	31.3
		42.6			57.4	

（図13）部活動と勉強と
どちらをがんばっているか



（図14）部活動のない日は勉強が
はかどるか



出席率の程度と満足感

部活動の「 楽しさ 」と「 苦しさ 」を比較してみると図15、図16のとおりである。「 楽しい 」が、なんと62％にも達している。「 苦しさ 」の度合いでは、運動部は厳しく、文化部はゆるやかだと言えそうである。

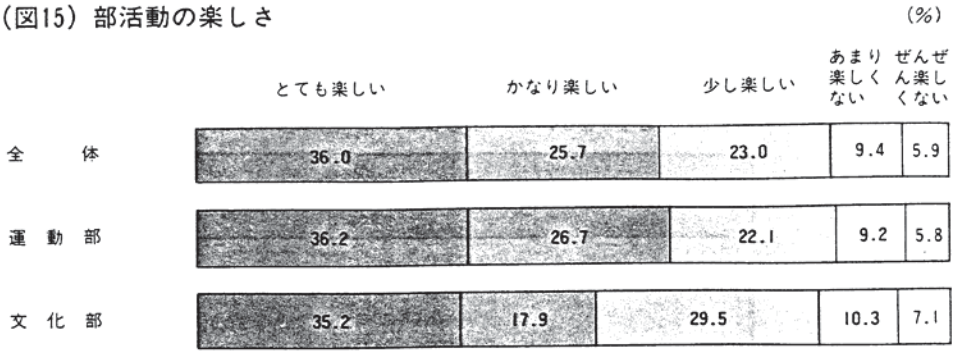
ところでその「楽しさ」と「苦しさ」の感情は、運動部と文化部とではほとんど違いが認められないが、出席率により大きな差が生じている（図17）。例えば、運動部に「毎回出席している」者の「楽しさ」は55％であるが、反対に「半分ぐらいしか参加していない」者は、18％しか「楽しさ」を満足していない。不思議なことに、図18を見ると、出席率の高い者ほど「とても苦しい」（12％）と感じ、あまり熱心でない者は６％しか苦しさを感じていないことがわかる。つまり、出席率の高いほど、苦しさの中にも喜びを体得しているのであろう。

部活動全体に対する満足度では図19にみられるように、全体として、程度の差はあれ、「 満足している 」者は、72％にも達している。

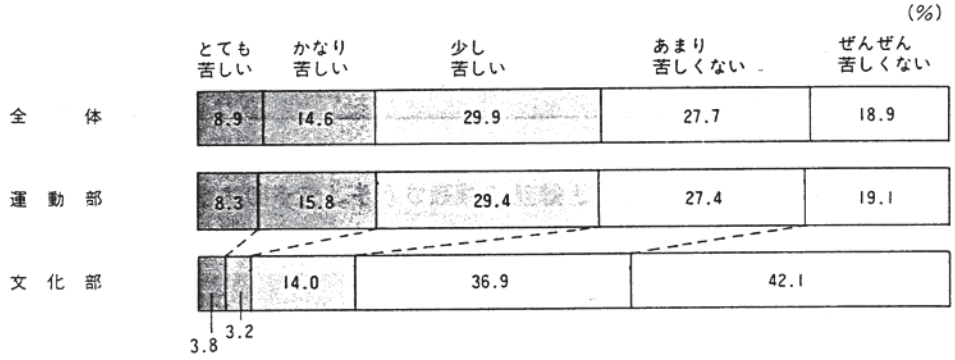
しかし、楽しく満足した部活動の中にも悩みは尽きない様子で、図は省略したが、「退部しようと思ったことがある」者は37％にもなる。ただ、実際に部をやめた者は、14％にしかすぎない。

「あなたにとって、部活動は、今の生活の中で何番目に大切ですか」の問いに対して、「 毎回必ず出席 」している者の53％が「 1番目 」と答えきっている。しかし、全体としてみると「 1番目 」は、９％にしかすぎず、「 2番目 」（ 25％ ）、「 3番目 」（ 33％ ）、「 5番目以下 」（ 21％ ）となっている。

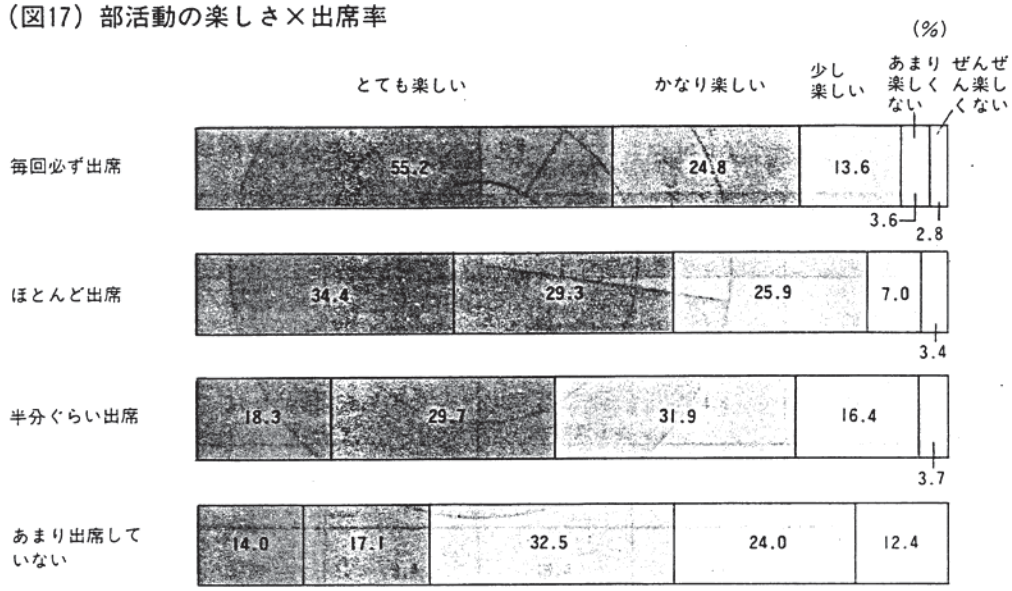
（図15）部活動の楽しさ



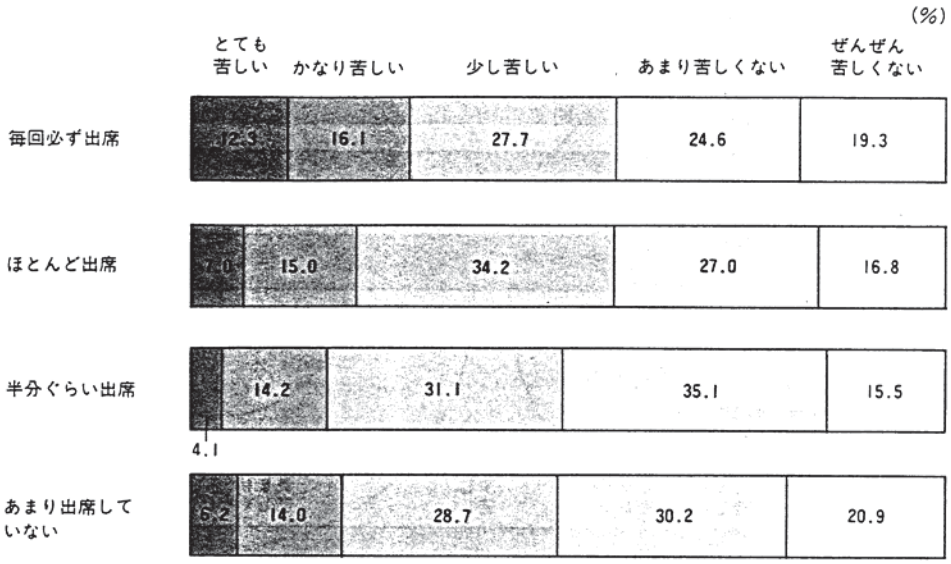
（図16）部活動の苦しさ



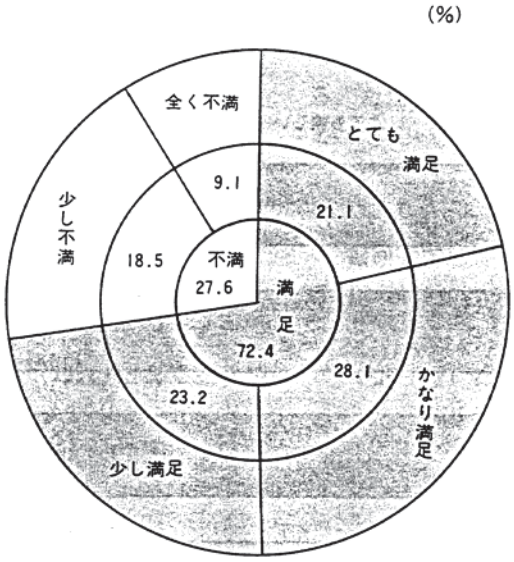
（図17）部活動の楽しさ×出席率



（図18）部活動の苦しさ×出席率



（図19）部活動の満足度



2．教育効果

部活動で得たもの

「あなたは、部活動の中で涙を流しそうな感動を経験しましたか」の問いに対する答えは、図20のとおりである。運動部、文化部ともに大差なく、予想に反して「一度もない」が34％とトップを占めた。「ほとんどない」を含めると、なんと56％もが感動の涙を流したことがないのである。出席率による差を予想したのが表6だが、残念ながら大きな差は認められなかった。たまにしか参加しない者でも、感動的な場面である大きな対外試合などには参加しているので、数少ない感動を味わうことができるのであろう。

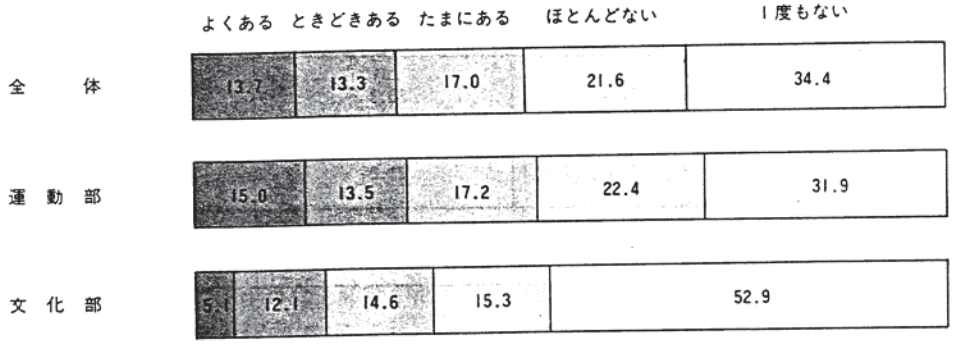
このデータから判断する限りでは、日常の活動の中には、感動の場面がほとんどないに等しいようだ。できなかった一人が、ようやく達成した喜びに全員が感動を胸にする、などという場面はほとんどないようである。

部活動で得たものについては、「努力」(51％)、「友情」(47％)、「がまん強さ」(38％)、「協力・団結」(33％)、「礼儀」(31％)となっている（表7）。

また、図21から明らかなように女子にい

（図20）部活動の中で涙を流しそうな感動を経験したこと

(%)



（表6）感動した経験×出席率

(%)

尺度 / 項目	よくある	ときどきある	たまにある	ほとんどない	1度もない
毎回必ず出席	8.1	14.9	20.7	17.9	28.4
ほとんど出席	11.2	14.2	17.0	24.4	33.2
半分ぐらい出席	11.2	12.1	13.0	27.9	35.8
あまり出席しない	11.0	9.4	13.4	22.8	43.4
ほとんど欠席	9.8	3.9	9.8	5.9	70.6

たっては、「上級生より先生の方に礼儀正しくあいさつをする」者は、わずか20%しかいない。そうすると、部活動で彼らが得た「礼儀正しさ」とは、社会性のある文化としてのそ

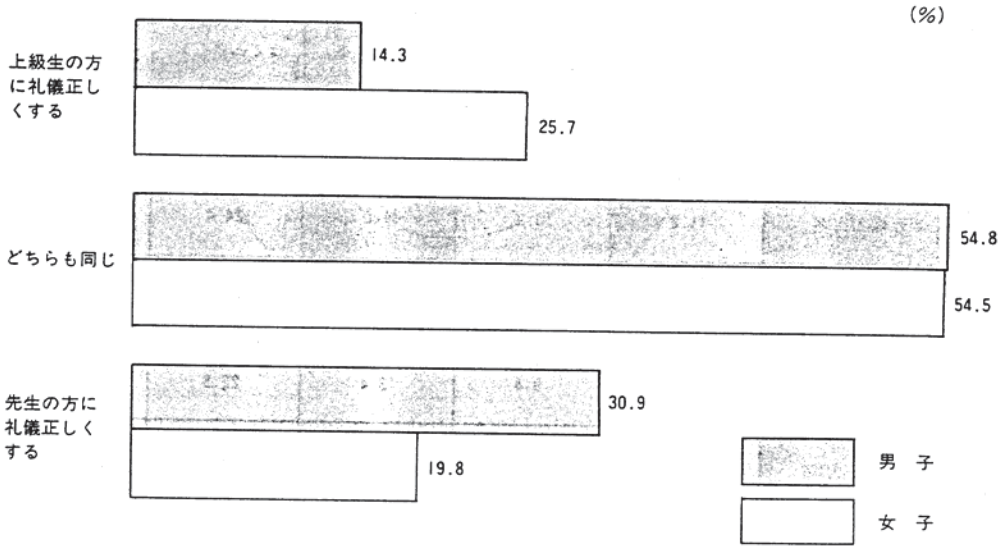
（表７）部活動で得たもの

(%)

項　　目	全　　体	運　動　部	文　化　部
努　力	50.5	52.1	41.4
友　情	47.2	46.8	50.0
がまん強さ	38.2	40.4	21.5
協力・団結	33.1	33.0	34.2
礼　儀	30.6	31.3	26.6
思いやり	25.7	27.0	17.0
厳しさ	25.6	27.6	12.0
けじめ	25.4	25.3	26.6
正義感	21.2	23.2	7.6
満足感	20.1	20.0	20.3

注）数値は10項目から複数回答

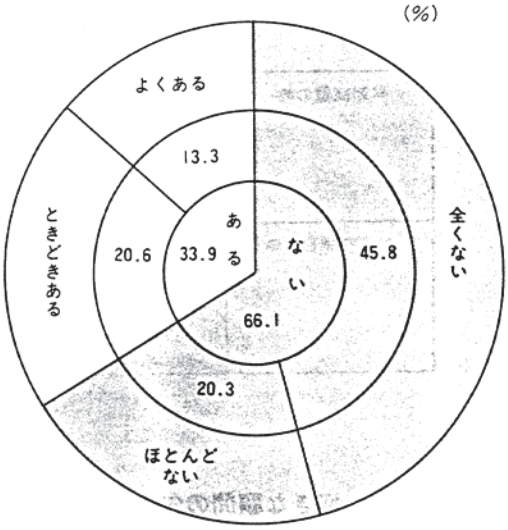
（図21）上級生と先生に対する礼儀正しさ



れではなく、特別なタテ社会の中での先輩・後輩関係なのかもしれない。

コーチ（顧問の先生）との関係では、体罰を受けたことが「ある」者が、34%にも達している（図22）のは一考を要する。これも学校間の差が大きく、実に「よくなぐられる」と答えた者が46%にも達する中学校もあれば、完全にゼロの学校もあったことをつけ加えておきたい。体罰が横行している学校では、部活動をとおして「友情」を得たと答える者が、わずか2%にしかすぎず、全体平均の47%と比較してかなり低い数値になっていることを考慮すると深く考えさせられる内容を含んでいる。だが幸いなことに、上級生の下級生への体罰がほとんど認められなかったのには、胸をなでおろすことができた。

（図22）コーチから体罰を受けた経験
（運動部のみ）



3．指導者と友人

生徒の求める指導者

さて、それでは、生徒たちは顧問に対してどんな願いを持っているのであろうか。

図23からわかるように、意外にも顧問が活動場所で指導することが少なく生徒まかせになっている状況が浮きぼりになっている。

生徒たちの88%もが運動部で活動していることを考えると事故の危険や心配も大きいと言えよう。大多数の部活動で、学校の教師が顧問になっている実態を考えると、責任の所在をもっと明らかにしておく必要を感じる。

表8に生徒の好む顧問像の結果を掲げたが、「上手、下手の区別なく平等に扱ってくれる」(56%)、「やさしい」(52%)、「一緒にやってくれる」(51%)、「技術がすぐれている」(45%)、「困っていることや悩みを聞いてくれる」(38%)となる。注目したいのは、「技術」よりも、いわゆる「面倒見のよいやさしい先生」を望んでいることである。

しかし、生徒たちは、図24のように、おおむね顧問には満足しているように見える。もっとも、放課後の教師の多忙な生活を目の当たりにしているせいか、熱意のある指導を受けるのは「ムリな注文」と遠慮しているフシも感じられないことはない。

ほとんど無給の奉仕活動であるだけに、この結果は教師サイドとしては、現場の顧問は「よくがんばっている」という気がしてくる。

（図23） 活動の時、顧問がついているか

（%）

	いつも必ずついている	だいたいついている	時々ついている	あまりついていない	ぜんぜんついていない
早朝練習の時	18.3	24.0	14.7	16.7	26.3
	42.3			43.0	
放課後練習の時	18.6	34.8	20.4	17.1	9.1
	53.4			26.2	

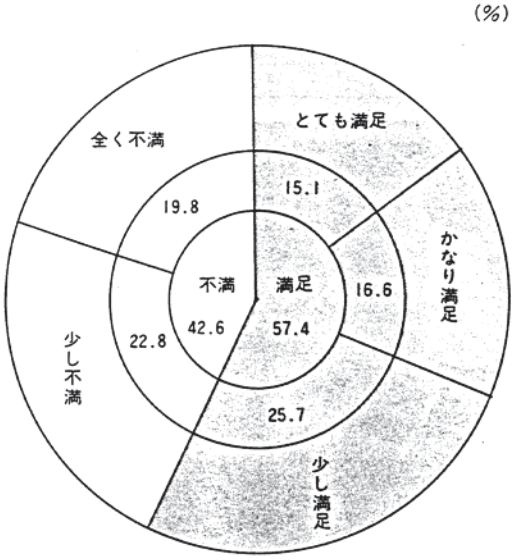
（表８） 好きな顧問の先生像

（%）

項　　目	割　　合
上手、下手の区別なく平等に扱ってくれる	55.9
やさしい	51.5
一緒にやってくれる	51.3
技術がすぐれている	44.7
困っていることや悩みを聞いてくれる	37.5
厳しい	32.6
生徒にまかせてくれる	16.7
兄さん（姉さん）のような感じ	15.3
勉強のことも面倒をみてくれる	13.9
強い人、上手な人を伸ばす	9.3

注）10項目から複数回答の結果

（図24）顧問の先生への満足度



部の友だちとクラスの友だち

データは省略したが、クラスの友だちと部活動の友だちとの親しみやすさの度合を比べた結果では、「クラスの友だちの方が親しみやすい」(27%)に対して、「部活動の友だちの方が親しみやすい」(26%)と答えた者の割合がほとんど同じ数字を示している。

部活動の友の持つよさは理解しやすい。しかし、クラスの中には趣味も特技も異なる多様な生活集団の中でこそ得られる人間発達の幅と深さが潜んでいることを見落としてはなるまい。学校によっては、クラスと部の友だちの親しみやすさの比較で「部の友だちの方が親しみやすい」（26%）に対して、「クラスの友だちの方が親しみやすい」（6%）という数値の得られたところもあった。部活動で得る友だちもそれなりに貴重だが、学校生活が、クラスが土台となって支えられている以上、学級生活をもう少し大事にすべきであろう。

あくまでもクラスの創造的発展があってこそ、「好きで楽しい」部活動で一人ひとりの個性が豊かに伸びるものと思われる。部活動に片寄りすぎて自己本位、強い者勝ちの部活動にならないように広い視点を持ちたいものである。

第III章 部活動を途中でやめた生徒

1．やめた時期と理由

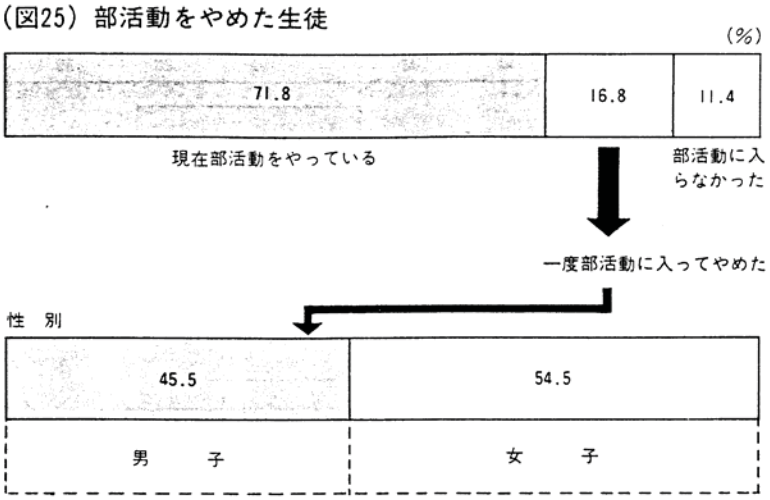
部活動をやめた時期

あこがれを抱き、期待して入った部活動であるがそれがつづけられず、中途で退部する生徒も結構多い。この章ではこのような生徒を対象としてやめた時期や理由、やめてからの生活について概観してみよう。

まず図25を見てみよう。部活動を途中でやめた生徒は全体の約17％で、その割合は女子の方がやや多い。また運動部・文化部ともに同じ割合でやめており特に差異はみられない。しかし退部率は、学校によって大きな較差があり、30％以上の生徒が退部した経験を持つ生徒がいる学校があれば、５％未満の生徒しか退部していない学校もある。これは、退部の規定が学校によって大きく異なっていて簡単に退部できる学校と、なかなか退部を認めない学校の規定上の違いもあろう。また、部活動の内容は学校によって大きな差があり、生徒が入部に対して持っていた期待と実際の活動内容に大きな違いが見られる理由によることも大きいと考えられる。

部活動をやめる時期は、図26のように、２年生の途中での退部がもっとも多く、つづいて、２年生になる時がこれにつづいている。なお、女子では、１年生の１学期、すなわち、

(図25) 部活動をやめた生徒



15校

部活動をやめた生徒の割合	学 校 数
30 % 台	● ●
20 % 台	● ● ● ● ● ●
10 % 台	● ●
10%以下	● ● ● ● ●
平 均	16.8%

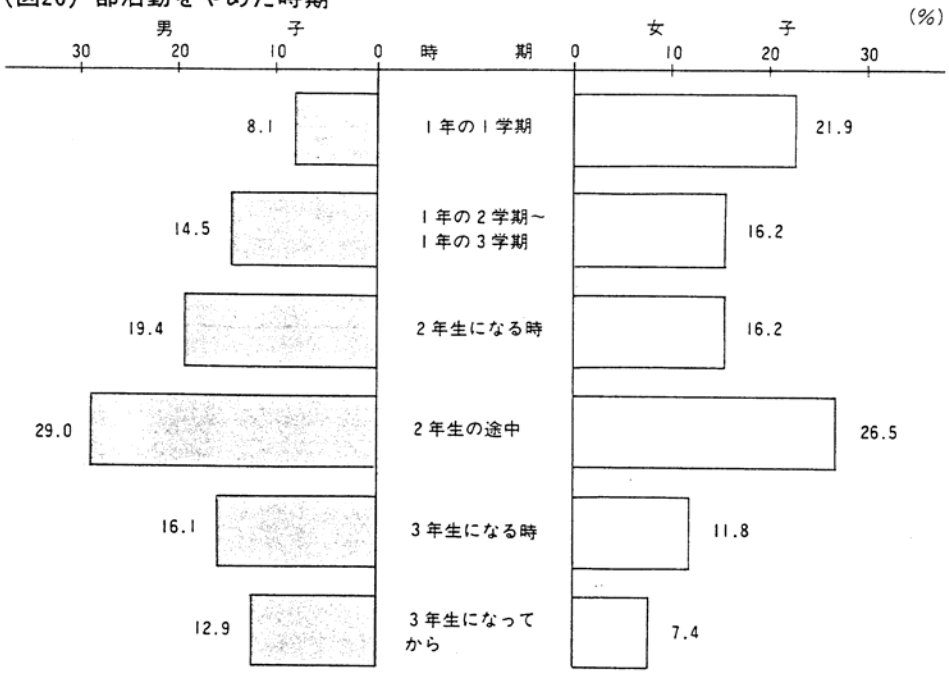
(%)

	運 動 部	文 化 部
現在入っている生徒の割合	88.1	11.9
やめた生徒が所属していた部	88.6	11.4

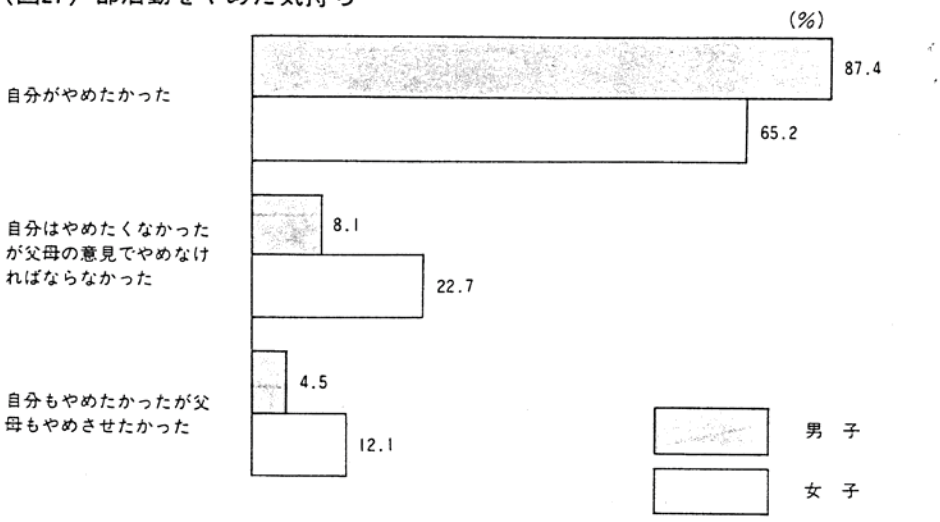
入部してまもなくというケースが多い。

現在の3年生がやめた時期をまとめると、1年の時、男子42%、女子55%、2年男子45%、女子38%、3年男子13%、女子7%になっており、男子では2年生、女子では1年生の時やめた生徒が多い。

（図26）部活動をやめた時期



（図27）部活動をやめた気持ち



また、部活動をやめるとき「誰の意見でやめたか」の問いに対し、「自分の考えでやめた」と答えた生徒が大部分であるが、父母の意向の影響を受けてやめた生徒が男子は13%、女子では35%とかなり多い。しかも「自分はやめたくなかったが父母の意見でやめなければならなかった」と答えた生徒が女子で23%とかなり多くの割合を占めている（図27）。

部活動をやめた理由

部活動を途中でやめることになった要因はなんだろうか。ひとつだけの理由もあろうし、二つ以上の理由が重なったためやめるようになった場合もあるだろう。

ここでは、部活動をやめる要因を考え、これらの要因がどの位関係するかを探ってみることにした。図28がその結果である。この図は「 とても 」と答えた割合の順に並べたものであるが、「 かなり 」を合わせた割合もほとんど同じ傾向を示している。

40%近くの生徒が、自分の考えていた部活動と実際の活動との違いを退部理由に挙げている。この理由を挙げた生徒は2年生に多い。この時期は物珍しい時期や、夢中になって活動する時期が過ぎて、基礎練習ばかりでおもしろくないとか、練習がマンネリ化しているとか、なんとなく不満が出てくる時期でもある。2年生の途中でやめる生徒の理由として多いのはこのほか、「レギュラーになれず下働きばかりである」「自分の技術の向上が見られない」などがある。当然のことながら、運動部に属していた生徒と文化部に属していた生徒とでは要因の占める割合が違う。やめる要因を今まで属していた部とクロスさせて「 とても 」「 かなり 」の占める割合の多い順5位を並べてみると、表9のようになる。

第1位のイメージはともかく、第2位以降の順位での特徴は、運動部に属していた生徒に学校と勉強との関係の要因、健康状態の要因を挙げた生徒が多いことである。練習がハードでついていけないという理由とも合わせて考えると、運動部の練習は部活動をしている時間だけでなく、相当体力を使うため、家庭に帰ってからも、家庭生活に大きな影響を与えていたと考えることができよう。

また文化部に属した生徒では、むしろ友だちや先生との人間関係の要因が強く、運動部ほどは、勉強との関係が強くはないという傾向を読みとれよう。

部活動をつづけられなかった要因はさまざまであろうが、部活動をやめる直接のきっかけになったのはなんだろうか。先の図28の16項目の要因の中でもっとも大きな理由について1つを選ばせた結果が次の通りである。

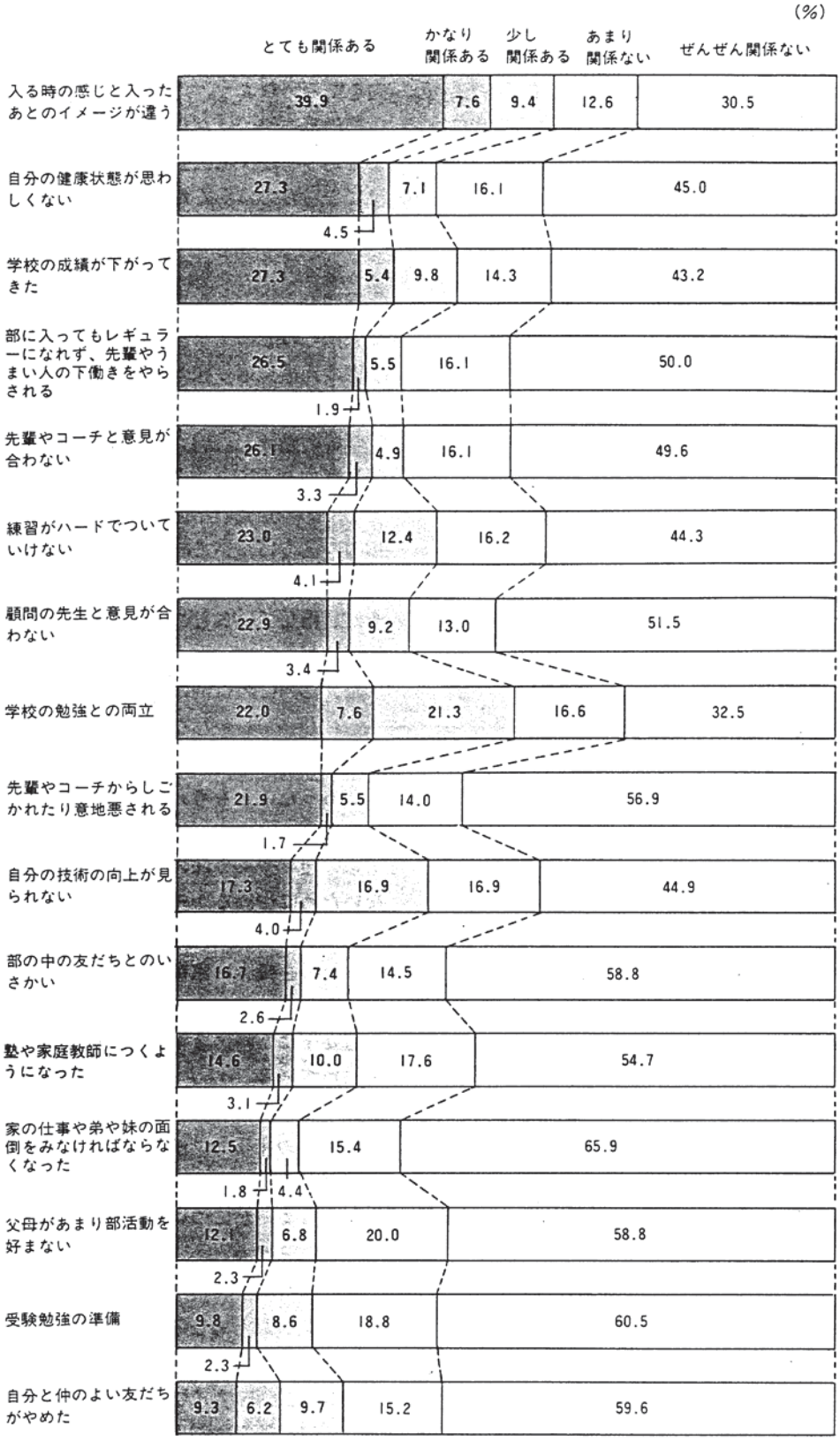
①顧問の先生との意見の相違　14.2%
②入部の時とのイメージの違い　10.5%
③家の仕事や弟や妹の面倒を見なければならない　9.0%
④学校の勉強との両立　8.6%
⑤先輩やコーチとの意見が合わない　8.6%

①や⑤の意見の相違は、練習や活動の内容、指導の仕方についての相違であることは容易に想像することができる。顧問の教師やコーチが目指しているものと、生徒が考えている活動にギャップがあったことも考えられる。また、部内での役割について不満であったかもしれない。しかしながら、それが部をやめる契機になるためにはやや、感情的なやりとりがあったことも考えられるし、事実、感情的な対立からやめる場合も多い。

家の仕事や弟や妹の面倒をみなくてはならないためにやめるケースは都会地の学校に多くみられ、母親がパートで働きに出るようになったのを機会に家事を分担しなければならなくなったためと考えられる。これは男子よりも女子に、特に3年生の女子が多くの割合を占めている。

部活動をやめる決意をするまでに相談した人は表10の通りで、かなりいろいろな人と相談している。これは、部活動をやめる時、どうしたらよいかについて相当迷いがあったことを感じさせる。

(図28) 部活動をやめる要因



（表９）部活動をやめる要因

(%)

運動部		文化部	
部活動のイメージが違う	38.7	部活動のイメージが違う	24.2
学校の勉強との両立	25.5	部の友だちといさかいがあった	18.7
学校の成績が下がってきた	23.9	顧問の先生と意見が合わない	18.2
自分の健康状態が思わしくない	22.5	学校の勉強との両立	15.7
練習がハードでついていけない	22.1	塾や家庭教師につく	15.2

注）とても関係ある 1 ―― かなり関係ある 2 ―― 少し関係ある 3 ―― あまり関係ない 4 ―― ぜんぜん関係ない 5

（1〜2：%）

（表10）部活動をやめる時相談した人

(%)

担任の先生	94.2	父	81.1
顧問以外の先生	93.9	母	73.0
部の顧問の先生	90.9	友だち	57.6
兄　弟	82.1	その他	80.6

注）数値は複数回答の結果

2．やめてからの生活

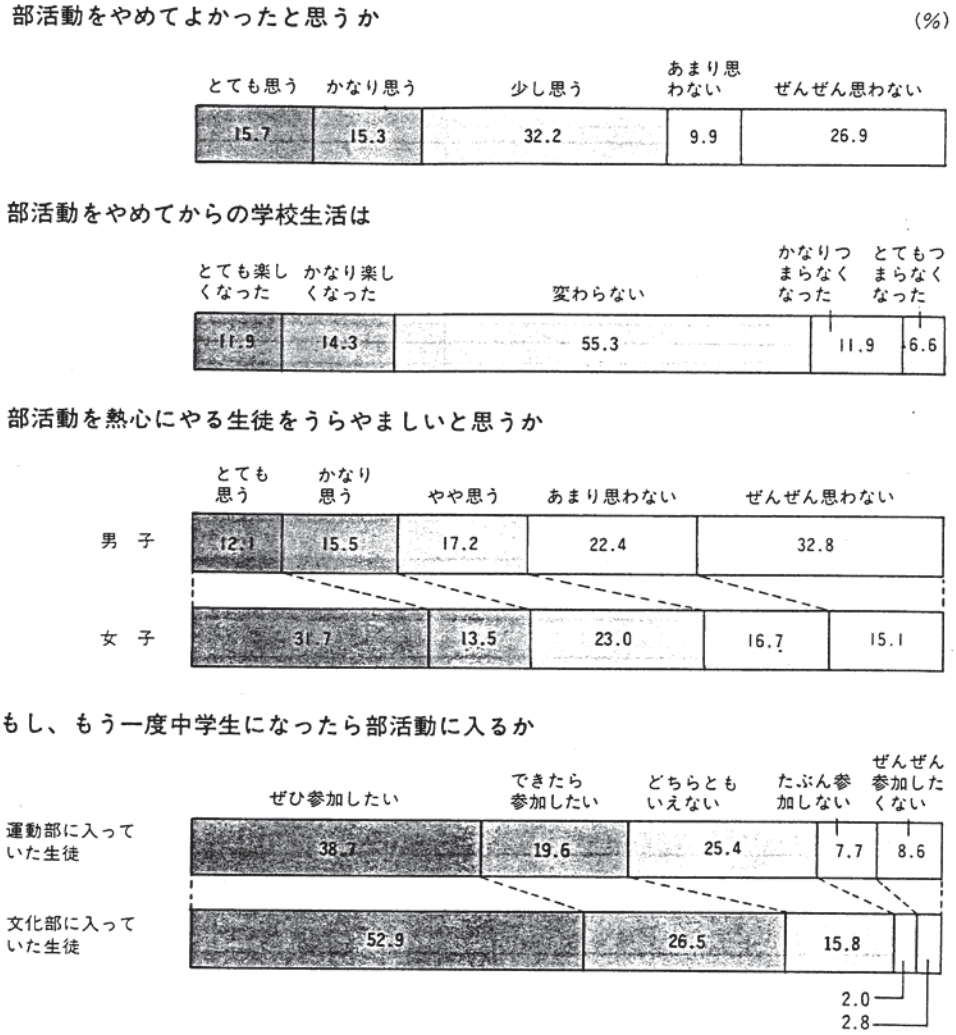
家庭生活と学校生活の変化

部活動をやめてからの生活がどのように変わったかを図29にしたがって調べてみよう。まず「部活動をやめてよかったか」「部活動をやめてから学校は楽しくなったか」の問いに対して、それぞれ、63%、26%の生徒が肯定的な答えをしている。しかし「部活動をやめてよかった」という答えの率が大きいのに対し「学校生活がつまらなくなった」と答えた生徒が19%もいることは、自分の心の中では部活動をやめたことについて納得していても、なんとなく学校生活に物足りなさを感じていることをうかがわせる。

これは、「部活動を熱心にやっている生徒をうらやましいと思うか」という問いに対して57%の生徒が「そう思う」と答えており、特に女子にこの傾向が強いことからも、部活動に対して未練を持っていると考えられる。

やめる理由として大きな要因をしめる勉強

（図29）部活動をやめてからの気持ち



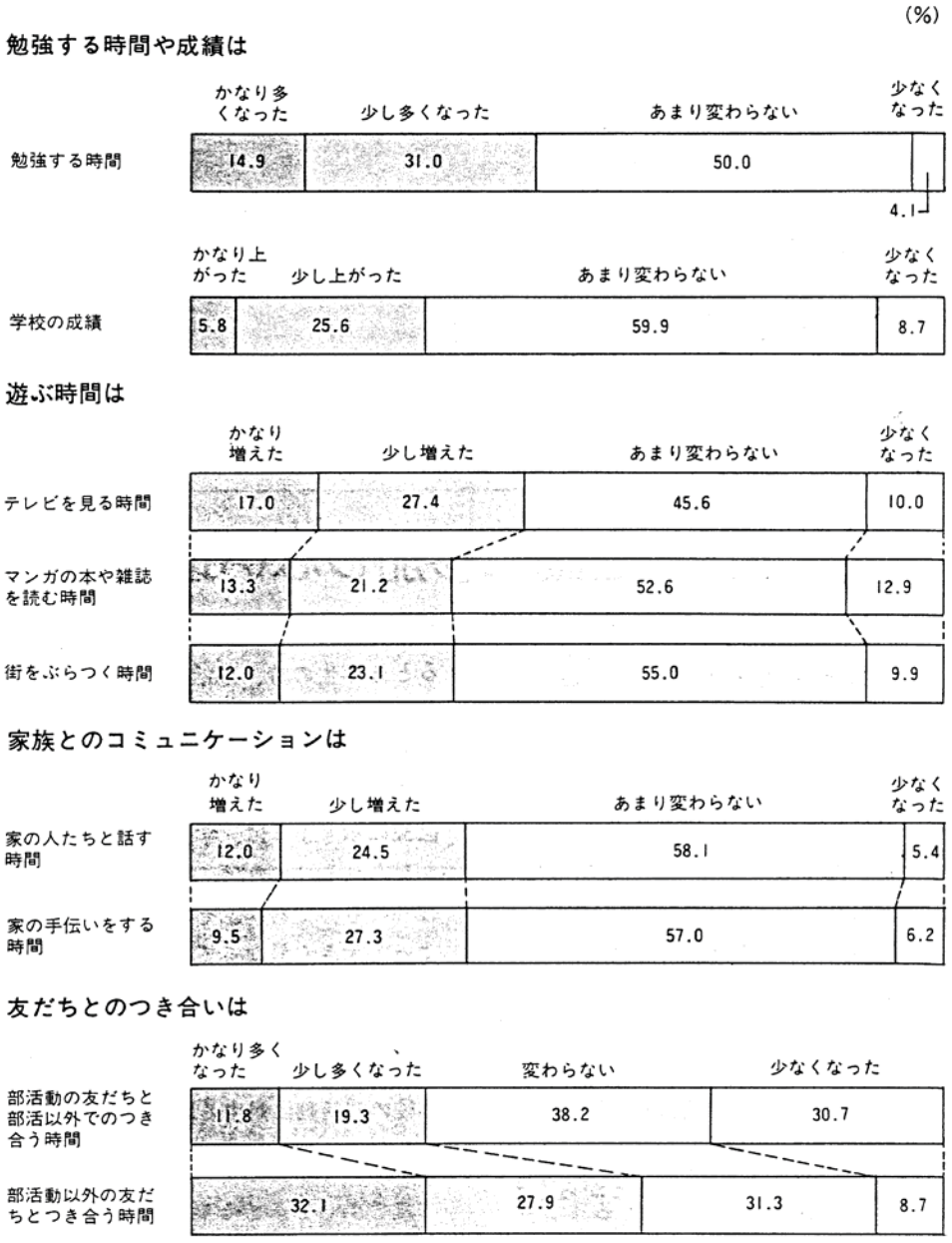
は、やめてからどのように変わったのであろうか。

図30に示したように、かなり多くの生徒が、勉強する時間が増えたと答えている。また、約30%の生徒が成績が上がったと答えている。この意味では部活動をやめた目的はかなり達成されているといってよいであろう。

また家族とのコミュニケーションや部活動以外の生徒との交流も増えてきている。したがって、部活動をやめることは一概に悪いことだとは言い切れない。しかし、遊ぶ時間も確実に増えるし、非行的な行動に関心を示すと部活動に常に欠席がちとなり、やがてやめていくという事例が多いのも事実である。

したがって、部活動をやめたいという申し出があった時、教師はその理由をよく分析し、家庭と密接に連絡しあい、生徒の一人ひとりの実態に則して、相談にのることが大切であると考える。

(図30) 部活動をやめてからの生活



第Ⅳ章 部活動に1度も参加していない生徒

1．部活動に参加しない理由

学校によって大きな差

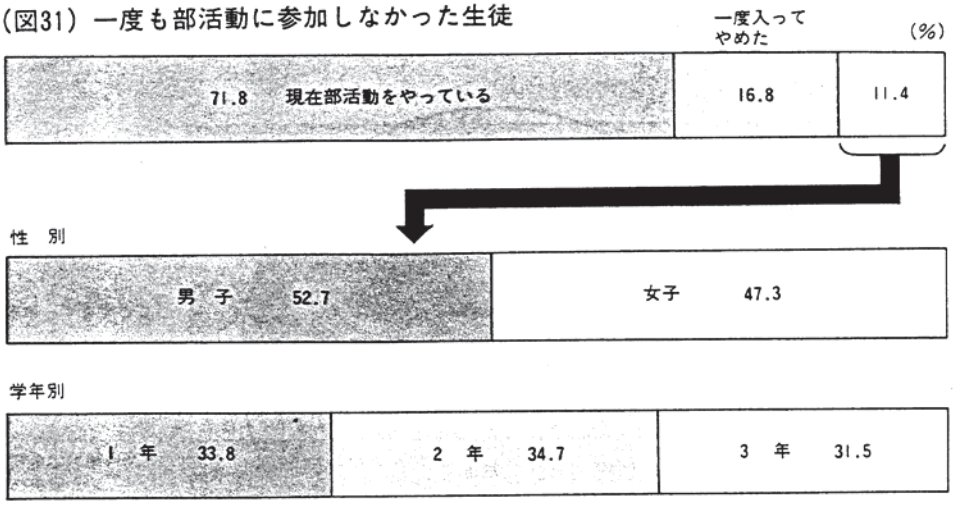
小学生が中学入学のとき、中学校生活にもっとも期待し、あこがれているのは部活動であると言われている。

しかし、一部ではあるが、部活動に興味を示さなかったり、背を向けている生徒が見られる。このような生徒の生活や考え方について、概観しておこう。

部活動に一度も参加したことのない生徒の割合は、図31に示すように、全体の約10％である。また、男女差や学年差は見られない。学年差がないことは、この調査対象が「一度も参加したことのない生徒」であることから考えると、1年生の時、部活動に参加しなかった生徒はその後も引きつづいて、2年生、3年生になっても参加しないことを示している。

しかし、部活動に参加しない生徒の割合は図32に示すように、学校によって、大きな差が見られる。これは、部活動が正規の教育課程外のものであり、その内容や運営が学校によって大きく異なっているところに原因がある。すなわち、 部の種類も多く教師が積極的に参加をすすめている学校もあれば、部の数も少なく、希望参加であるというように、学校の部活動に対する取り組みや姿勢に大きく左右されていると言えよう。

(図31) 一度も部活動に参加しなかった生徒



(図32) 部活動に参加しない生徒の割合

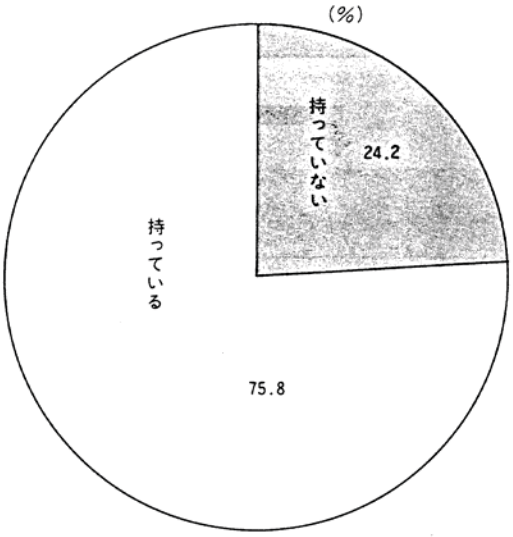
15校

部活動に1度も参加しない生徒の割合	学 校 数
50%台	●
40%台	
30%台	●
20%台	●
10%台	● ● ● ●
10%以下	● ● ● ● ● ● ● ●
平 均	11.4%

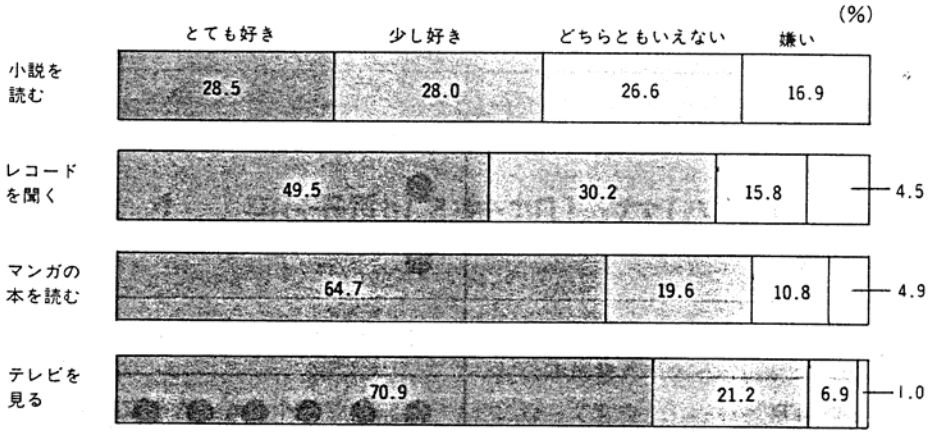
趣味や娯楽

それでは、部活動に参加していない生徒は趣味や娯楽を持っていないのだろうか。図33によれば、76%の生徒がなんらかの自分を熱中させる趣味を持っていると答えている。図34はそれらの趣味や娯楽がどんなものであるかについて調べたものである。「テレビを見ること」(92%)、「マンガの本を読むこと」(84%)、「レコードを聞くこと」(80%)、「小説を読むこと」(57%)がかなり高い割合を示している。一般に今の生徒は、テレビを見たりマンガの本を読むことは大変好きであるが、この結果から見ると、部活動

（図33）熱中させる趣味は



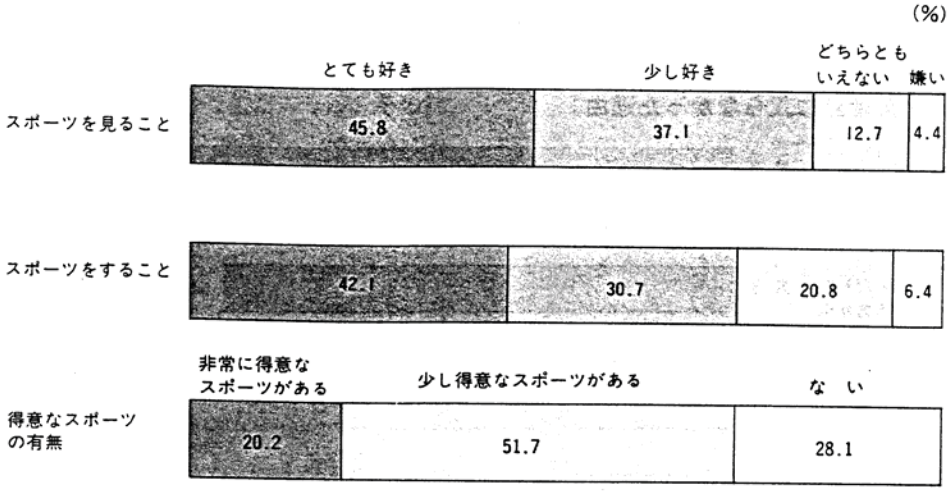
（図34）好きなもの



に参加していない生徒は特にこの傾向が多いように感じる。しかし「今の子どもは本を読まない」と本離れが指摘されている中で、50%を超える生徒が「本を読むことが好き」と答えたことは、注目に値しよう。

さらに、図35や図36に示されるように、スポーツを不得意とする生徒も多く、「部活動に全員参加しなければならなかったら」という問いに対して、チームワークという集団としての行動を要求される運動部を希望する生徒の割合が全体の比率より少なく、文化部を希望する生徒の割合が大きいのも特徴的な傾向である。この結果から考えると、部活動に参加しない生徒の中には、集団として趣味を楽しんだり協力し合って技術や知識の向上をはかるより、個人的にその世界に熱中し、没頭することに楽しみを感じている生徒がかなり多いのではないかと考えられる。

（図35）スポーツに対する関心



（図36）もし全員が入らなくてはならないとしたら

(%)

	運動部	文化部
現在入っている生徒の割合	88.1	11.9
1度も入ったことのない生徒が必ず入らなければならない時の選択	63.9	36.1

部活動より友だちとの雑談

生徒が部活動に入らない理由は1つだけの理由ではなく、いろいろな理由が重なっていると考えられる。そこで、一般的な形で、部活動にはいらない要因について、尋ねてみると、図37のような結果が得られる。「とても」と「かなり」の割合に注目して要因を考えると

①友だちとのおしゃべりの方が楽しい　35.1%
②入りたい部がない　32.7%
③学校の勉強と両立しない　26.4%
④部活動以外に自分の熱中する趣味がある　24.8%

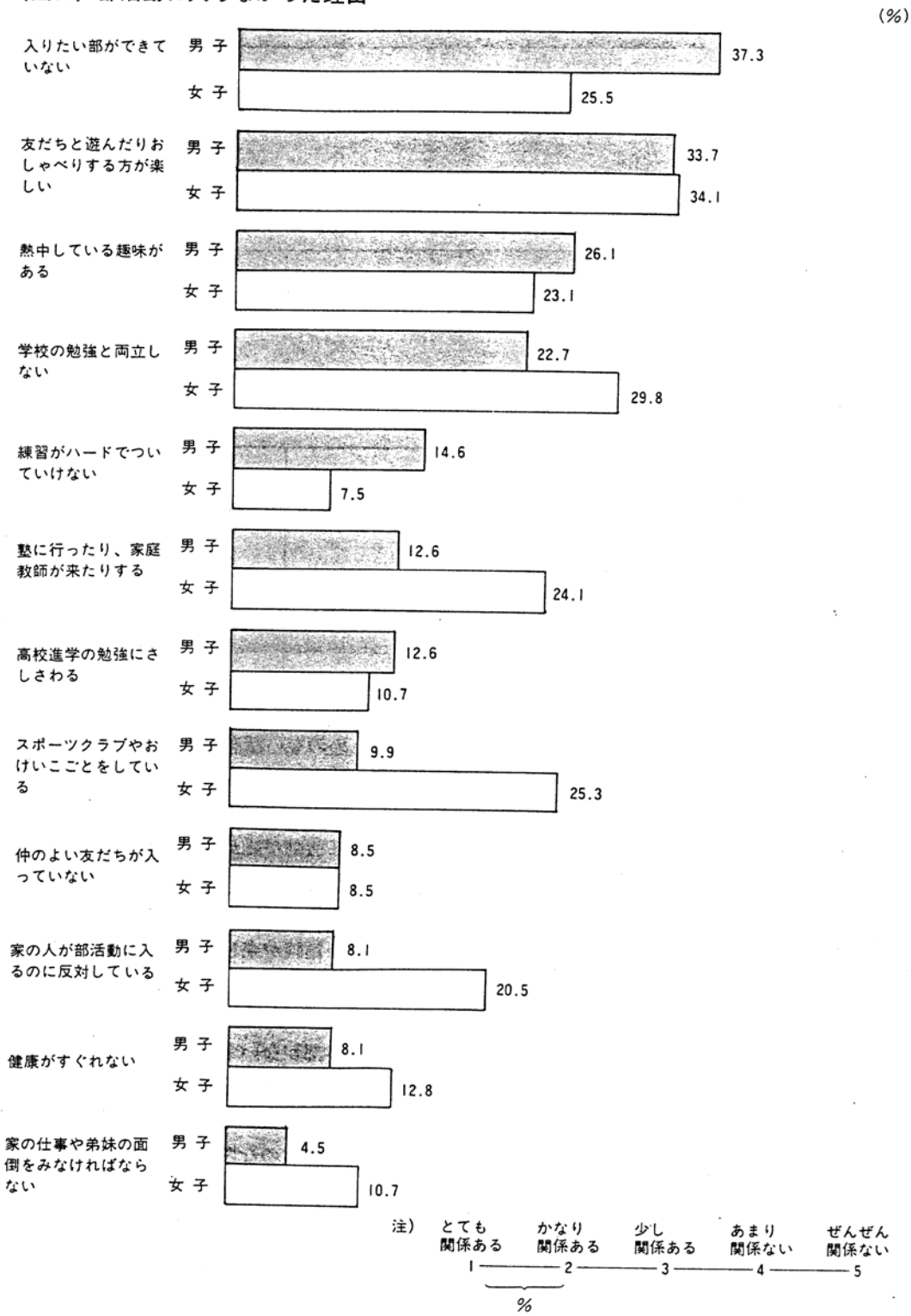
となる。

友だちとの雑談（内容はあまりなく、ただとりとめのない話をする）が学校生活の楽しさの中で大きな部分を占めていることは容易に理解できる。確かに、部活動をしている生徒も、部活動が終わってからなかなか帰らず雑談に花を咲かせ、顧問の先生を手こずらせることが多い。部活動に参加している生徒も案外この雑談が楽しく部活動に参加しているのかもしれない。したがって、部活動に参加しない生徒が雑談の方が楽しいというのは、入りたい部がないというのと結論的には同じであって、部活動そのものがややおっくうであって、できることなら面倒なことはさけたいという意欲のなさにつながっている層もあるとも考えることができる。

「学校の勉強と両立しない」、「部活動以外に自分の熱中する趣味を持つ」という理由は男女差が大きく、前者は女子に、後者は男

子に多くの割合をしめている。これは、女子の方が一般的に几帳面であり、要領がよくないという特質から、部活動をやっていたらとても勉強に時間がさけないと考えたからであろう。

（図37）部活動に入らなかった理由



部活動に入らない理由

これらの要因のうち、生徒が部活動に入らない一番大きな理由はなんだろうか。その結果を「とても」と「かなり」の部分に着目して5番目までとって順位に並べると、

①入りたい部がない　26.1%
②学校の勉強との両立　11.8%
③おしゃべりが楽しい　9.6%
④部活動以外の趣味　8.6%
⑤塾や家庭教師　8.0%

となる。また、友だちが入らない一番大きな理由を予想させ、同じように5番目までについて並べると

①塾や家庭教師　19.6%
②学校の勉強との両立　18.0%
③おしゃべりが楽しい　17.9%
④入りたい部がない　13.6%
⑤高校の進学のための勉強　6.5%

となる。自分が入らない理由と友だちから見た理由とは順位に大きな違いが見られるが、大きく分けると、「入りたい部がない」「部活動以外に熱中したいものがある」「塾や家庭教師など勉強との両立」が大きな理由になっている。

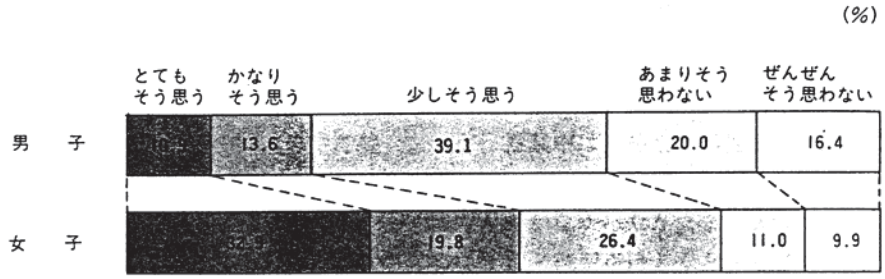
最後に部活動と勉強との両立について部活動をやっていない生徒がどのように考えているかを考えてみよう。「部活動を熱心にやっている友だちについてどのように考えているか」についての結果が図38である。

多くの生徒が、友だちが部活動に熱中しているのを見て、うらやましいと考えている。特に女子にその傾向が強く、「とても」と「かなり」を合わせると、50%を超えている。この結果を見て、参加していない生徒も、部活動に否定的な考えを持っているのではないことがわかる。むしろ、熱中している友だちに対して自分もあのようにやってみたいと尊敬の念を抱いている様子さえうかがえる。

そこで「自分があのように熱心に部活動をやったら勉強する時間や学校の成績はどうなるか」を質問してみた。結果は図39のようになり、かなり多くの生徒が勉強する時間が減り、成績が下がるだろうと予想している。特にこの考えは、男子よりも女子に強く表れている。

部活動と勉強の両立はできる。友だちはそれをやっている。しかし、自分は部活動をしたら勉強と両立できず、成績が下がってしまうだろうから、と考えている生徒が、部活動不参加者の中にかなりの数がいることも事実である。

（図38）友だちが部活動で熱中しているのを見てうらやましいと思うか

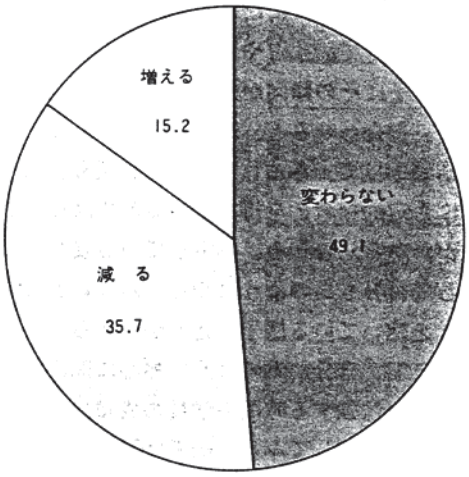


（図39）自分が部活動に入ったら

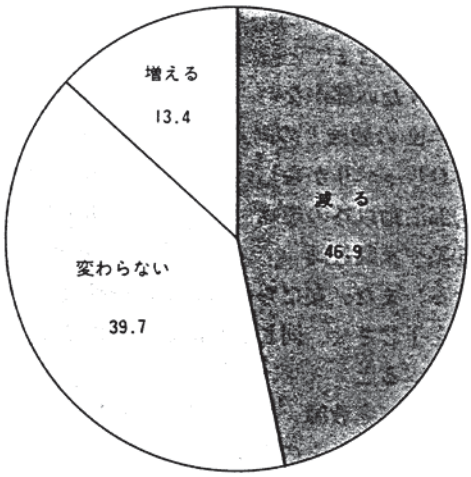
勉強する時間

（%）

男子

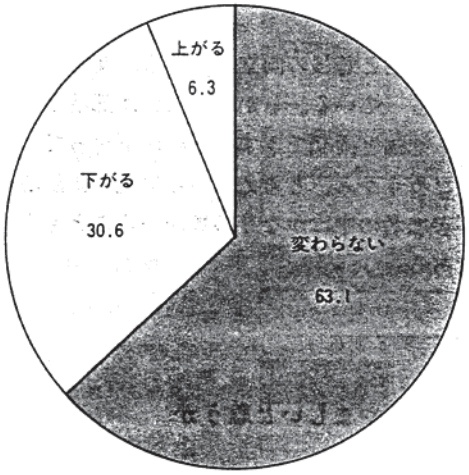
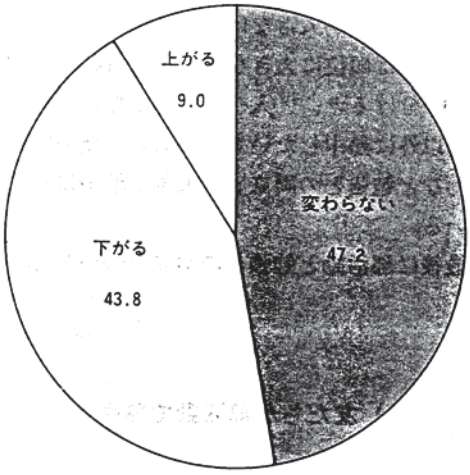


女子



成績

男子



女子